

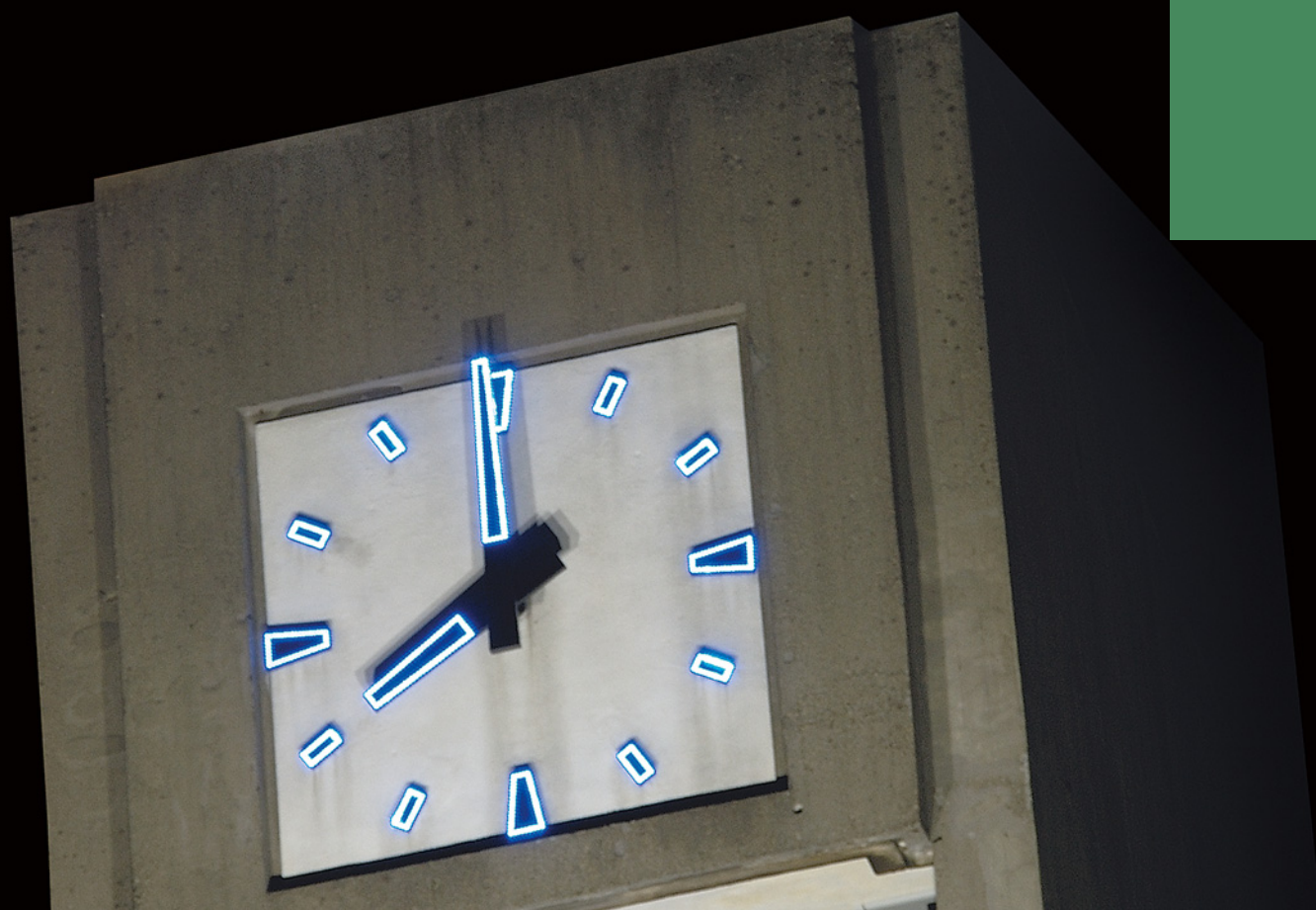
# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.149

2005年10月

高等研究院第1回スーパーレクチャーを開催



## 目次

●ニュース	
高等研究院第1回スーパーレクチャーを開催	2
研究成果に関する記者発表を行う	4
スーパーサイエンスハイスクールに協力	6
名古屋大学公開講座を開催	7
認証評価に関する講演会を開催	8
東海・北陸地区国立大学法人等技術専門職員研修を実施	8
職員体育大会を開催	8
●知の未来へー若手研究者の紹介	
担保法システムの未来をさぐる 田高 寛貴（大学院法学研究科助教授）	9
●知の先端	
アジアモンスーンは森を創り、森はアジアモンスーンを維持する	10
安成 哲三（地球水循環研究センター教授／高等研究院流動教員）	
古書の世界の全貌を眺めたい！	12
塩村 耕（大学院文学研究科教授）	
●教育のデザインとプラクティス	
問題解決型教育から問題発見型教育へ	14
田中 剛（大学院環境学研究科教授）	
●地域にひらく	
地域共同研究：らくらくパソコン「e-なも君」プロジェクト	16
横井 茂樹（大学院情報科学研究科教授）	
●学生の元気	
フィールドと私	18
古川 範英（大学院国際開発研究科国際開発専攻博士課程前期課程2年）	
●職員から	
米国研修から4年 久田 淳子（研究協力・国際部国際課国際企画掛 [国際学術コンソーシアム推進室]）	19
●部局ニュース	
文学部が木浦大学校夏期日本語研修生を受け入れる	20
日中WTO国際シンポジウムを開催	20
ウズベキスタン共和国で日本法教育研究センター開所式を開催	21
国際シンポジウム「体制移行国における憲法適合性審査機関の役割」を開催	22
オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」始まる	22
工学部がテクノフロンティアセミナーを開催	23
工学部・工学研究科技術職員ら5名が日本工学教育協会賞（業績賞）を受賞	23
第4回農業ふれあい教室を開催	23
動物と食をテーマに公開講座を開催	24
市民公開講座「アルツハイマー病—その病態と克服に向けた試み—」を開催	24
名古屋大学電子図書館国際会議を開催	25
博物館が名誉教授による特別講演会を開催	25
環境学研究科がシアクラ大学理学部と学術交流協定を締結	26
留学生日本語研修コース修了式を挙げる	26
ICCAE 第2回オープンセミナーを開催	26
●新任部局長等の紹介	27
●名大を表敬訪問された方々 平成17年6月16日～9月15日	27
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年8月16日～9月15日	28
●イベントカレンダー	31
●INFORMATION	
名古屋大学ホームカミングデー	34
●ちょっと名大史	
豊田講堂と勝沼胸像	36

# 高等研究院第1回スーパーレクチャーを開催





高等研究院第1回スーパーレクチャーが、9月8日（木）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、本学の教職員や学生、一般市民など、約200名の参加を得て開催されました。

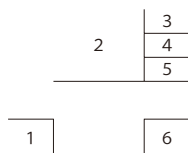
このレクチャーは、国際的に最先端をゆく学術活動の一端を広く社会に伝えることを目的として、今年度初めて開催されたもので、世界最高水準の研究者を招聘して行われる講演（招待レクチャー）と高等研究院の採択研究プロジェクトが終了した教員による研究成果の発信（高等研究院レクチャー）の2部構成で行われました。

レクチャーは、田上英一郎高等研究院副院長の司会進行のもと、初めに、北住高等研究院長の趣旨説明、山本理事（研究担当）のあいさつがあり、次いで、招待レクチャー及び高等研究院レクチャーが行われました。

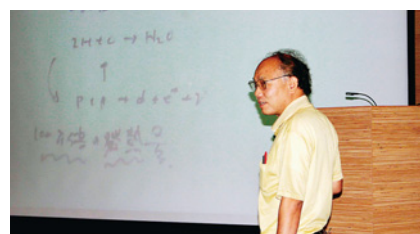
招待レクチャーでは、本学理学部を卒業し、素粒子研究でノーベル賞級との評価を受けている京都産業大学教授・京都大学名誉教授の益川敏英氏が、「真理へのアプローチ、媒介項は何かー科学研究における画期的飛躍は何によってもたらされたか、歴史の中にその手がかりを探るー」と題して講

演を行いました。益川氏は、科学研究における画期的飛躍が何によってもたらされたかについて、主に専門の素粒子物理学分野を事例に、ユーモアあふれるエピソードを交えながら、研究者にとって他者と「議論すること」の重要性など、多くの示唆に富む内容を話しました。

また、高等研究院レクチャーでは、岡田 猛教育発達科学研究科教授による「芸術家の創作過程」、家森信善経済学研究科教授による「東海地域の金融システムの特徴と課題：名古屋の金利はなぜ低い？」、元理学研究科の有本博一東北大学教授による「多剤耐性菌と闘う」、元理学研究科の楠見明弘京都大学教授による「細胞中の一



- 1 会場の野依記念学術交流館
- 2 趣旨説明する北住高等研究院長
- 3 講演する岡田教育発達科学研究科教授
- 4 講演する家森経済学研究科教授
- 5 講演する丹羽理学研究科教授
- 6 講演する益川京都産業大学教授



分子を見る、触る」及び丹羽公雄理学研究科教授による「顕微鏡でニュートリノの種類を見分ける」と題する5件の講演が行われ、高等研究院での研究成果が披露されました。

続いて開催された懇親会には、講師や学内外の様々な分野の研究者等の参加があり、専門分野を超えての活発な議論が交わされました。

なお、高等研究院では、今後も研究成果を広く学内外に発信するため、同院所属の教員を中心とした講師陣による特定の研究テーマに主眼を置いた高等研究院フォーラムを、11月25日（金）に、「アジアの共通理解と総合的支援体制」と題し開催する予定です。



## 研究成果に関する記者発表を行う



祖父江医学系研究科教授による記者発表の様子

研究成果に関する記者発表が、9月2日(金)、9日(金)、本部4号館第8会議室において行われました。

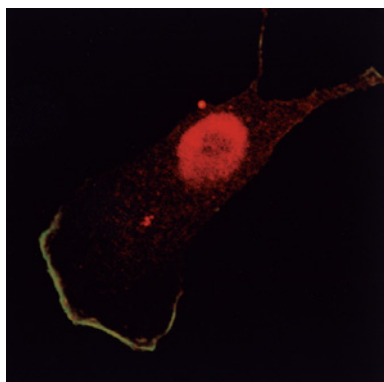
本学では、「優れた研究成果をメディアを通して社会に積極的に発信する」ことを中期計画に掲げ、強化しているところで、6月23日には、文部科学省記者クラブにおいて、松岡 信生物機能開発利用研究センター教授、芦荊基之助助教授らのグループの研究成果に関する記者発表を行っています(本誌147号9ページ参照)。

2日は、高橋雅英医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授らのグループ、藤巻 朗工学研究科教授らのグループによる研究成果に関する記者発表が、また、9日は、祖父江元医学系研究科教授らのグループ、菅井秀郎工学研究科教授らのグループによる研究成果に関する記者発表が行われ、いずれも多くの新聞やテレビで大きく取り上げられました。

なお、メディアを通じての教育・研究成果の発信については、広報室(内線2016)までご相談ください。

### 高橋雅英医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授らのグループががん細胞浸潤能を促進するたんぱく質を発見

高橋雅英医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授らのグループは、がん細胞の浸潤・転移に重要な役割を果たすたんぱく質を発見し、9月5日付けの米国科学雑誌「Developmental Cell」で発表しました。がんの広がりを抑制する治療薬の開発につながるのと同時に、がん研究だけではなく、血管形成、神経細胞の移動や極性の決定等の様々な細胞機能の分子メカニズムの解明に重要な手がかりを与えるものと期待されています。



リン酸化されたたんぱく質の「Girdin (ガーディン)」(左下の帯状部分)

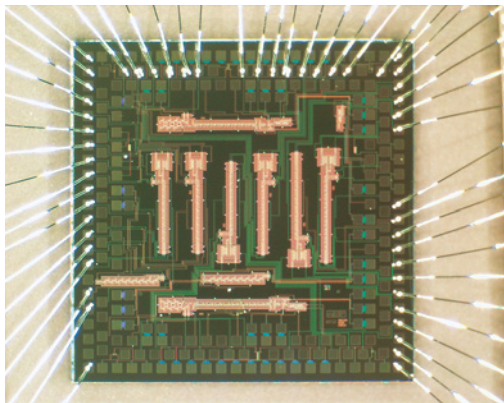
これまで、悪性度の高いがん細胞内に多くある「Akt/PKB」という酵素が活性化することで、がん細胞が浸潤・転移しやすくなるということは知られていましたが、そのメカニズムは解明されていませんでした。同グ

ループは、この酵素によって、リン酸化されると、細胞を形作る繊維状のたんぱく質アクチンの構造を変化させ、がん細胞の浸潤する能力を高める働きをするたんぱく質があることを発見し、「Girdin (ガーディン)」と名付けました。このたんぱく質の発見により、がん細胞の移動のメカニズムが解明されるとともに、こうしたメカニズムが働くのを抑制する薬剤を開発できれば、がんの浸潤・転移を制御することが可能となります。

### 藤巻 朗工学研究科教授らのグループが超電導で世界最高速の集積回路を開発

藤巻 朗工学研究科教授らのグループは、(財)国際超電導産業技術研究センター超電導工学研究所と共同で、超電導技術を利用し、動作周波数120ギガヘルツ(1秒間に1200億回論理動作)という世界最高速の集積回路の開発に成功し、9月6日(現地時間)にオランダで開催されたISEC'05(第10回国際超電導エレクトロニクス会議2005)で発表しました。

同グループは、これまで、マイナス269度付近の極低温状態で動作する超電導体と、「単一磁束量子(SFQ)」(磁束の最小単位)を使ってデジタル信号を発生・処理することで、40ギガヘルツ以上で動作する集積回路の開発に成功



超電導 SFQ シフトレジスタ回路が載ったチップ

していましたが、今回は、製造方法の高度化や設計技術の開発により、回路の微細化及び高速化を実現した結果、動作周波数120ギガヘルツでの動作の実証に、世界で初めて成功しました。

今回開発に成功した集積回路は、市販のパソコンに使用されている半導体 LSI（大規模集積回路）に比べ、動作速度は30倍以上速く、消費電力は1万分の1以下で、これを使用すれば、気象・宇宙・生命現象の解明に必要な超高速コンピュータの実現や、ユビキタス社会に向けてのキーテクノロジーとなる超高速ルーターの実現（80日分のテレビ番組の画像データをわずか1秒で送信することができるネットワークの実現）につながります。

### 祖父江元医学系研究科教授らのグループが球脊髄性筋萎縮症に抗がん剤が有効であることを突き止める

祖父江元医学系研究科教授らのグループは、抗がん剤として治験中の薬剤「17-AAG」が、有効な治療方法がない神経変性疾患の一つである「球脊髄性筋萎縮症（SMBA）」に効果があることを動物実験等で突き止め、9月11日付けの米国科学雑誌「Nature Medicine」（電子版）に発表しました。

SMBA は、悪性腫瘍と並ぶ21世紀の医学の最重要課題とされる神経変性疾患（特定の神経が変性・死滅する進行性の疾患）の一つで、男性のみに発症し、脳幹や脊髄の運動神経細胞の障害によって、手足や舌の筋肉が萎縮する遺伝性疾患です。アンドロゲン（男性ホルモン）の受容体遺伝子の異常で、神経細胞の中に異常なアンドロゲン受容体たんぱく質が蓄積し、細胞が死滅するのが原因とされています。

同グループは、抗がん剤として治験が行われている「Hsp90阻害剤」の一つである17-AAGを、SMBAの病因遺伝子（変異アンドロゲン受容体遺伝子）を組み込んだモデルマウスに投与したところ、SMBA発症の原因となる変異たんぱく質の量が2分の1から4分の1に減少していることを確認し、変異たんぱく質が薬剤で選択的に分解していることが明らかとなりました。また、薬剤を投与していないグループは、25週目で85～90パーセント死亡したのに対し、投与したグループは、約80パーセント生存し、薬剤の効果が確認されました。

17-AAGは、SMBA以外にも、アルツハイマー病、脊髄小脳変性症、ハンチントン病などの神経変性疾患の治療にも効果を発揮する可能性があるとして期待されています。

### 21世紀COEプログラム Plasma-Nano グループが大型高密度プラズマの生成に成功

21世紀COEプログラム「先端プラズマ科学が拓くナノ情報デバイス」（Plasma-Nano、拠点リーダー 菅井秀郎 工学研究科教授）のグループは、(株)液晶先端技術開発センター及び産業技術総合研究所太陽光発電研究センターと共同で、メートル級で高密度のプラズマを均一に生成する技術を開発しました。この技術は、大きい面積で高品質の薄膜を必要とするエレクトロニクス製品の開発だけでなく、ガラス、プラスチック、布等の大面積材料のプラズマ表面処理にも広く応用でき、将来の低価格化にもつながると期待されています。

メートル級の大幅面積パネルが必要とされる液晶や太陽電池の製造には、プラズマによる薄膜作製技術が不可欠であり、これまでは、高周波放電で生成されたプラズマが使用されてきましたが、プラズマ密度が低く、分布も不均一なため、50センチ四方以上の薄膜を作製しようとすると、著しく膜質が不均一になる等の支障がありました。

同グループは、マイクロ波放電の新技術を使うことにより、長さ1メートル、幅と厚さが30センチの均一のプラズマの生成に成功しました。従来に比べ、面積で数倍、密度で10倍以上のプラズマを生み出すことができ、数メートル四方の非常に大きな面積のプラズマの生成も可能となりました。

なお、今回開発した技術及び成果は、来年1月に仙台で開催される反応性プラズマ国際会議（ICRP）で発表される予定です。

## スーパーサイエンスハイスクールに協力



スーパーサイエンスハイスクール夏の学校 in 陸別

本学では、高大連携の一環として、今年度もスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に協力し、体験授業や教員の派遣等を行っています。

SSHは、高等学校及び中高一貫教育校における理科・数学に重点を置いた取組を大学等との密接な連携の下で推進し、将来の国際的な科学技術系人材を育成することを目的として、文部科学省が平成14年度から実施しているもので、現在、全国で82校が指定されています。

本学では、理学研究科、医学系研究科、工学研究科、生命農学研究科、多元数理科学研究科、情報科学研究科、太陽地球環境研究所、博物館等が、愛知県立岡崎高等学校、愛知県立一宮高等学校及び三重県立四日市高等学校のSSHに協力し、夏休み期間中にも本学の施設等を利用し

て体験授業が実施されました。

大学院情報科学研究科では、北 栄輔同研究科助教授と大学院学生6名が、8月8日（月）、情報文化学部ワークステーション室で、四日市高等学校の1年生8名の指導にあたり、プログラミング言語であるNQCを用いたマインドストーム（レゴ社製のロボット）についてのプログラミング実習とMATHEMATICA（数式処理言語）による演習が行われました。

また、太陽地球環境研究所は、8月17日（水）から8月19日（金）までの3日間、陸別町議会議場で開催された「スーパーサイエンスハイスクール夏の学校 in 陸別」に協力しました。この学校は、一宮高等学校と北海道立帯広柏葉高等学校の生徒が研究成果発表や討論を行うもので、上出洋介同研究所教授が校長を務め、両校から2年生各5名、引率教員各2名の参加がありました。物理、化学、生物、天文、環境等幅広い分野を題材として、「ミミズの味覚実験」、「スプライト光撮影」、「脳と心理」等、10テーマについて研究成果発表が行われ、様々な視点から活発な質疑が展開されました。論理的思考力、独創性を高める討論会では、「研究者になるには?」、「科学と技術はどう違う?」について、高校生なりの意見や感想が多数述べられ、また、「なぜだろうセッション」では、「地球外高等生物が存在するのか」、「人はなぜ歳をとるのか」等について、自由な発想の意見が交わされました。最終日には、微生物の働きで形成されていることで有名なオンネトー湖の生きているマンガン鉱床を観察し、現場での基礎実験も行われました。参加した生徒からは、普段の授業では気付かなかった「なぜと考える思考、問題点を提起することが大切であることを認識した。」等の感想がありました。



四日市高等学校のSSHの実習風景

# 名古屋大学公開講座を開催

－情報が世界をつくる！－



講義風景

平成17年度名古屋大学公開講座が、8月23日（火）から10月11日（火）までの期間、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この公開講座は、昭和44年に名古屋市教育委員会との共催事業としてスタートし、昭和55年に本学の主催事業となってから、今回で36回目です。公開講座委員会において、テーマや講義内容、講師等について検討され、今年度は、「情報が世界をつくる！」を総合テーマに、全学から講師を選任し、全15回の講義が行われました。今年度の受講者は、

133名で、50歳代、60歳代が全体の8割を占め、過去に受講したことのある方が8割を超えました。

講義では、本学の教員が、高度情報化社会で私たちがより幸せな生活を送るためにどうすればよいか等について、各研究分野の最新の研究成果を交えながらわかりやすく解説し、受講者は熱心に聴講していました。講義終了後には、受講者から講師に質問が寄せられるなど、このテーマに対する関心の高さを伺わせました。なお、10回以上出席した受講者には修了証書が手渡されました。

回	小 テ ー マ	所属・職名	担当講師名
1	脳卒中を中心とした医療情報ネットワークの構築	大学院医学系研究科教授	吉田 純
2	情報と医療－画像処理の医療への応用－	大学院情報科学研究科助教授	森 健策
3	コンピュータのしくみ	大学院工学研究科教授	安藤 秀樹
4	情報伝達の数理 －より正確に、より安全に、より効率よく－	大学院多元数理科学研究科講師	久保 仁
5	情報と報道記者	大学院国際言語文化研究科教授	吉田 正也
6	高度情報社会と法の役割	大学院法学研究科教授	愛敬 浩二
7	情報と経済－ITは日本経済を救うか？－	大学院経済学研究科教授	根本 二郎
8	人の国際移動と情報	大学院国際開発研究科助教授	イゴリ サヴェリエフ Igor SAVELIEV
9	情報の宝庫としての文庫 －尾張名古屋の歴史的な文庫をたずねて－	大学院文学研究科教授	阿部 泰郎
10	情報を喰う脳－神経経済学の話から－	大学院生命農学研究科助教授	松島 俊也
11	遺伝情報－親から子に受けつがれるもの－	遺伝子実験施設教授	杉田 護
12	身体運動と情報－動きのしくみとその獲得－	総合保健体育科学センター教授	山本 裕二
13	学校教育における情報の認知と創造	大学院教育発達科学研究科助教授	藤村 宣之
14	アートのアンリアル－もうひとつの情報科学－	大学院情報科学研究科助教授	茂登山清文
15	岩石に記録された情報－地球環境の変遷－	大学院環境学研究科教授	榎並 正樹

## 認証評価に関する講演会を開催



講演する川口独立行政法人大学評価・学位授与機構評価研究部長

認証評価に関する講演会が、9月7日（水）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、川口昭彦独立行政法人大学評価・学位授与機構評価研究部長を講師に招き、開催されました。

この講演会は、学内関係者の認証評価制度に関する理解を深めるために実施されたもので、台風による悪天候にもかかわらず、役員をはじめ、総長補佐、部局長、計画・評価担当者等、約120名の参加があり、認証評価に対する関心の高さを伺わせました。

講演会では、山下理事のあいさつの後、川口評価研究部長から、「大学機関別認証評価について－評価文化に支えられた大学の発展－」と題して、認証評価制度の概要、機構の認証評価基準等について講演があり、参加者は熱心に聞き入っていました。講演後の質疑応答では、認証評価を受ける大学が留意すべき事項を中心に活発な意見交換が行われました。

## 東海・北陸地区国立大学法人等技術専門職員研修を実施

平成17年度東海・北陸地区国立大学法人等技術専門職員研修（情報処理コース）が、8月31日（水）から9月2日（金）までの3日間実施されました。

この研修は、同地区の国立大学法人等の技術専門職員に対し、職務遂行に必要な基本的知識及び新たな専門的知識、技術等を修得させ、職員としての資質向上を図るとともに、職員相互の交流に寄与することを目的として実施されたもので、14機関から24名の参加がありました。

初日は、千葉総務企画部長の開講あいさつ及び山本理事（全学技術センター長）のあいさつの後、安全衛生、コンピュータセキュリティ、学内LANの管理等についての講義が行われました。2日目は、Webアプリケーション入門、

データベースの利用技術、無線LAN・IP電話入門の3コースに分かれての実習が、3日目には、民間会社において、航空機による微小重力実験飛行・南極皆既日食撮影飛行のビデオ上映、それに使用した実機や航空機関係の資料室の見学等が行われ、充実した研修となりました。



開講のあいさつをする千葉総務企画部長

## 職員体育大会を開催



ピンポンの試合の様子

職員の健全な体育等の活動を通じて元気を回復し、職員相互の緊密度を高めることにより、勤務能率の発揮及び増進に資することを目的として毎年開催されている職員体育大会が、今年度も開催されました。

今年度は、8月25日（木）の勤務時間外に、11チーム参加によるピンポン大会が、また、8月29日（月）、31日（水）の勤務時間外には、8チーム参加による硬式テニス大会が行われ、各競技とも優勝を目指して白熱した好ゲームが繰り広げられました。

[成績結果]

種目	順位	チーム名
ピンポン	優勝	有言実行
	準優勝	SCIT2
	第3位	理学部Z
	第4位	理学部A
硬式テニス	優勝	キャドズ
	準優勝	山の上庭球倶楽部
	第3位	鶴舞
	第4位	理学部



# 担保法システムの未来をさぐる

―担保をめぐる問題の克服と新たな担保制度の構築をめざして

田高 寛貴 大学院法学研究科助教授

お金を貸した人が借主から確実に貸金を回収できるように用意された法制度が「担保」です。しかし、担保さえあれば安心、というわけではありません。債務者の周りには多数の債権者がひしめき、債務者に残された僅かな財産をめぐる、それぞれに担保権を主張し、相争うこととなります。その際、いかにして各人の権利実現を確保し、権利者間の利害を調整するかは、大きな問題です。

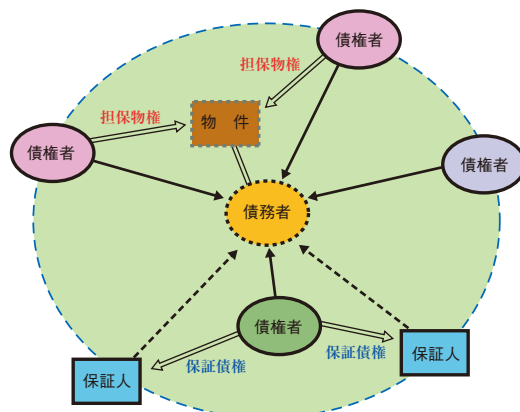
たとえば、Aの注文でBがA所有の土地にビルを建てたが、Aは工事代金を全く支払わなかったとします。この場合、Bは支払いがあるまで建物の引渡しを拒むことが法律上認められています(これを留置権といいます)。ところが、Aは、C銀行から融資を受けるさい、この土地に抵当権を設定していて、その借金も未払いになっていたとします。抵当権をもつCは、この土地を競売にかけて売却し、そこから貸金の回収ができるはずなのですが、Bが居座った状態では、買い手もあらわれず売却が難しくなります。しかし、かといってBへの立退請求を認めることにすると、今度はBの代金確保手段が失われることになります。さて、留置権者Bと抵当権者Cのいずれを優先させて考えるべきでしょうか。

近時は、競売を不調に終わらせることで不当な利益を得ようと、暴力団が競売物件に住んで威嚇し、買受希望者があらわれるのを阻止するといった執行妨害の例も目立っています(実は、上に述

べた留置権は妨害手段として悪用されることもあるのです)。こうした抵当権妨害は、金融業者に貸付を躊躇させ、ひいては経済取引社会全体にも甚大な支障を生じさせます。

各担保権者の利益に配慮しつつ、いかにして執行妨害を排除し抵当権の機能を高めるか、また、取引の需要に応じて新たな担保制度をどのように構築していくかが、バブル崩壊で債権者間の争いが熾烈さを増す現在にあっては急務となっています。私自身、種々の具体的な紛争事例を分析しつつ、現代社会において求められる担保法システムの構築をめざし、目下、研究をすすめています。

債務者のまわりには、多種多様な権利・人間がひしめく……



そうした権利者相互間の関係を調整するためのルールを構築するのが「担保法学」

## 名古屋地方裁判所一宮・岡崎・豊橋支部不動産競売物件情報

<b>豊橋支部</b>	入札期間(一般)平成17年10月5日～平成17年10月12日午後5時迄 開札期日 平成17年10月19日午前10時 お問い合わせ 電話 0532(52)3141	今回掲載物件のファックスサービスのボックスナンバー 期間人札(一般)09448000#	平成16年(ケ)1151号 名鉄津島線三河倉前駅南 橋本市形徳町細田139外 91タイプバス前駐り場 ◆マンション(住居用) 敷積 100.00㎡ 延床 200.00㎡
◆戸建て			
平成16年(ケ)1234号 豊鉄津島線南栄駅東方向約2.5km 豊橋市江島136-5 豊鉄バス西条停留所南方向約5分	206	宅地	117.79 昭和53年3月 5DK 2階建 未登記増築部分あり
平成17年(ケ)128号 東海道本線豊橋駅南東方約2.8km 豊橋市山崎字下7-89 豊鉄バス山崎南東方約4分	223	宅地	175.31 昭和59年5月 4DK 2階建 第三者占有あり 土地一部持分のみの権利 一部位置指定道路 隣地一体
平成17年(ケ)137号 東海道本線豊橋駅南東方約1km 豊橋市花中町185-1 豊鉄バス中郷停留所南東方約5分	542	宅地	170.24 昭和45年2月 8室 2階建 後面道路幅員約3.2m
平成17年(ケ)169号 東海道本線豊橋駅北西方約2.5km 豊橋市小向字小向135-3 豊鉄バス新栄停留所北西方約3分	553	宅地	113.00 昭和51年5月 4DK 2階建 後面道路幅員約3.5m
平成17年(ケ)148号 東海道本線豊橋駅南東方約2km 豊橋市牧野町194-3外 豊鉄バス三郷口停留所南東方約5分	623	宅地	236.84 昭和58年7月 5DK 2階建 土地一部持分のみの売却 地目一部公用道路
平成17年(ケ)156号 東海道本線豊橋駅南東方約3.8km 豊橋市新栄町字新栄18-16 豊鉄バス三郷口停留所南東方約5分	749	宅地	151.79 平成10年1月 3LDK 2階建
平成16年(ケ)1148号 豊鉄津島線高井町駅南東方約800m 豊橋市高井町字高井44-48 豊鉄バス高井町停留所南東方約10分	1085	宅地	157.32 平成9年3月 6LDK 2階建 建物内部に納骨場所あり
平成17年(ケ)132号 東海道本線二川駅南東方約1km 豊橋市高井町字高井4-11外 豊鉄バス高井町停留所南東方約10分	1100	宅地	327.63 229.79 S 9DK 2階建 第三占有者(6か月間明渡し要) 後面道路幅員約4m 土地一部持分のみの権利 持主一部田一部未建
平成17年(ケ)169号 豊鉄津島線南栄駅南東方約800m 豊橋市原町字原町12-29 豊鉄バス南栄停留所南東方約5分	1144	宅地	142.40 平成12年9月 3LDK 2階建

競売判が新聞に週1回掲載する「不動産競売物件情報」―備考欄に「第三者占有」とあったら要注意

# アジアモンスーンは森を創り、森はアジアモンスーンを維持する —水循環をととした気候と生命圏の相互作用—

安成 哲三 地球水循環研究センター教授／高等研究院流動教員

異なる気候帯には異なる植生が対応しており、気候が植生分布を一義的に決めているという考えは、19世紀のフンボルトやケッペンなどの地理学、気候学研究以来、すでに多くの人たちの科学的常識、すなわちパラダイムとなっている。このパラダイムの背景にはもちろん、生物は環境（変化）に適応しつつ進化してきたとするダーウインの進化論があり、20世紀における生態学、植生気候学などの基本的考え方としても生き続けてきた。現在も、人間活動による「地球温暖化」により植生分布、陸上生態系がどう変化するかという問題が、大きな課題として議論されている。ところが、1980年代にJ. ラブロックはガイア（Gaia）仮説を提唱し、地球の気候が生命圏によってコントロールされている可能性を指摘した。すなわち、

環境としての気候と生命圏が、単なる一方向的な関係ではなく密接に相互作用するひとつのシステムとして理解すべきであるとし、このパラダイムの大きな転換を迫った。しかし、このガイア仮説は、簡単な地球気候モデルにもとづく仮想的な考察であり、現実の地球の気候と生命圏において、どの程度の真実性があるのか、大きな疑問も持たれ続けてきた。

私たちは、日本やアジアの研究者と組んで、1990年代後半からアジアでの国際共同研究としてアジアモンスーンエネルギー・水循環研究計画（GAME）を進めてきた。この研究プロジェクトは、東南アジアから中国、モンゴル、シベリアの熱帯から寒帯にいたるモンスーンアジア地域のさまざまな森林や草原におけるエネルギー・水循環



図1：東シベリアの広大なタイガ林と、GAMEシベリア観測タワー。長期間のエネルギー・水循環の観測研究が行われている。（太田岳史生命農学研究科教授提供）

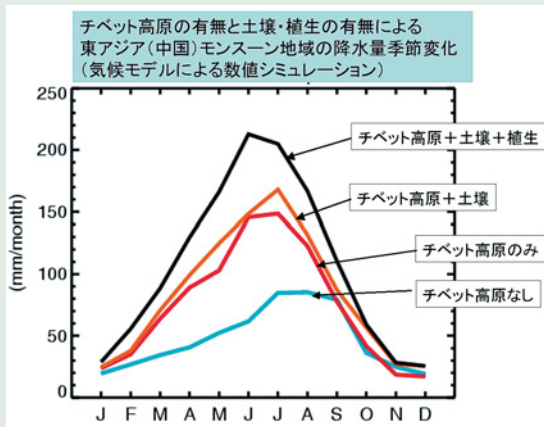


図2：全球気候モデルを用いた東アジアでの降水量の季節変化の再現。チベット高原のみを与えた場合、植生の土壌を与えた場合および植生のアルベード（反射率）を与えた場合と、順次、モンスーン季（雨季）の降水量が増加していくことがわかる。

の長期の観測を通して、植生がその地域の気候の季節変化や年々変動に能動的に関与し、気候・生態（相互作用）系を形成している実態を明らかにしてきた。例えば熱帯の常緑林では、雨季に降った雨が深い土壌中に貯留され、カラカラに乾いた次の乾季の最中に、蒸散により大気へ水を返すというスローな水循環が維持されていること、シベリアのタイガ（針葉樹林）では、夏に表層のみ融解する永久凍土中の水をタイガが効率よく利用すると同時に、活発な蒸発散を通じた地表面加熱の抑制により、永久凍土を維持しているという、タイガ・凍土共生系が存在していること、などである。

このような植生の気候に対する能動的な役割をより総合的に評価するために、私たちは簡単な植生モデルを組み込んだ気候モデルにより、アジアモンスーン気候の数値シミュレーションを行っ

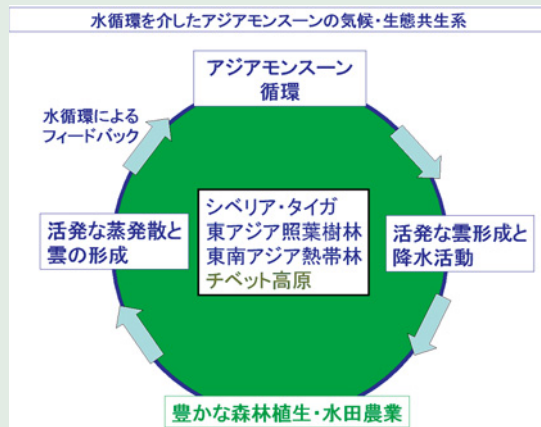


図3：アジアモンスーン地域においては、水循環を通じた気候・植生の相互作用により、気候・生態共生系が維持されている。

た。その結果、現在のアジア大陸では、チベット高原の地形的効果に加え、大陸を広く覆う植生により、効率よく太陽エネルギーが吸収され、蒸発散が活発化するため、潜熱による大気加熱が強められ、ひいてはモンスーンの循環が強化されて、雨の恵みを増やしていることが明らかになった。植生は気候に適応して分布しているだけでなく、自らの維持・生存に適するように気候を作り変えるという、気候・生態共生系（あるいはガイア？）の具体的なしくみがみえてきたわけである。このような新しい視点は、当面する森林破壊や砂漠化という地球環境問題の解決への糸口として重要になってくるはずである。この視点のさらに重要な示唆は、これまでの物理化学的な論理と生物学的論理を統合し止揚することなしに、私たちの住む地球と生命の理解はできない、ということであろうか。

1971年京都大学理学部卒業、1977年京都大学理学研究科（地球物理学専攻）博士課程修了、同年京都大学東南アジア研究センター助手、1982年筑波大学地球科学系講師、同助教授、教授を経て、2002年より名古屋大学地球水循環研究センター教授。筑波大学名誉教授。海洋研究開発機構地球環境研究フロンティア研究センター・プログラムディレクターを兼任。2003年より名古屋大学21世紀COE「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」拠点リーダー。名古屋大学高等研究院流動教員。主な受賞は、日本気象学会賞、同藤原賞、日経地球環境技術賞など。

やすなり てつぞう



# 古書の世界の全貌を眺めたい！

塩村 耕 大学院文学研究科教授

日本文学の長い歴史の中で、江戸時代前期の井原西鶴こそ、真に天才の名に値する数少ない文豪でした。ここでいう「天才」とは、先人による積み重ねの延長線上にない、突出した仕事をなぜか成し遂げた人という意味です。その「なぜか」がわからないからこそ天才なのですが、その間の事情のたとえ片鱗でもよいから明らかにしたいというのが私の宿願です。しかしながら、めぼしい参考文献（もちろん古典籍）は、先学によって渉猟され尽くして、新たな発見はなかなか得られません。もはや文献的な新見は偶然の発見に頼るしかない状況に至っています。その「偶然」の機会を、無理矢理に、滅茶苦茶に増幅させようと数年来奮闘しているわけです。

具体的には手近な名大附属図書館神宮皇学館文庫と、一大宝庫として世に知られる西尾市岩瀬文庫の古典籍を棚の片っ端から全て調査し、日本、いな世界においても、いまだかつてないような詳しい書誌データベースを拵えています。前者は8割がた完成し、既に公開しています（名大附属図



書館ホームページ→「古典籍DB」へ）。後者は推定全1万8千タイトルのうち、1万タイトル以上を終わらせました。

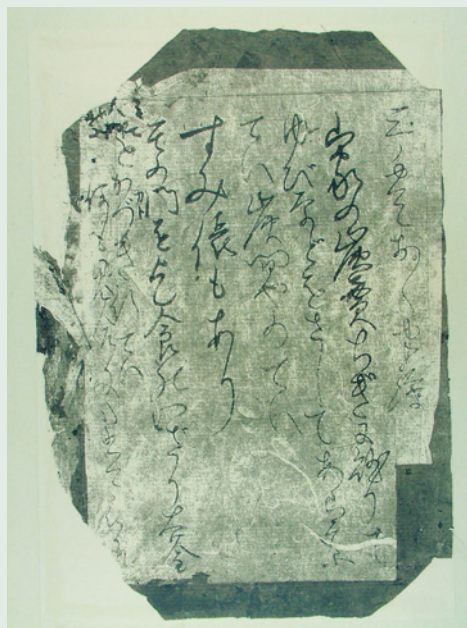
それは本欄の表題「知の先端」に対して申し訳ないような、阿呆な、どんくさい、誰もやろうと思いつかない仕事なのですが、何でもやってみるもので、石の上にも五年の間に、たとえばこんな発見がありました。皇学館文庫にあった『官職田舎弁疑』は江戸時代前期に刊行された有職故実の諺解書で、普通には手に取ろうと思わない本です。ところがその表紙の裏張りの中から、ある浮世草子の挿絵の絵組みを作者が指示した文書が出てきました。西鶴とほぼ同時代の浮世草子について、類似の資料は全く知られておらず、当時の本作りの一こまがわかる珍しい発見でした。

また、岩瀬文庫で出てきた、江戸時代のある禅僧の漢文集の中から、西鶴とほぼ同時代に啓蒙的著作を数々出した山雲子<sup>さんうんし</sup>という人の墓誌銘が出現、今まで謎だった同人の伝記が初めて判明しました。しかもその墓誌銘の撰文を依頼したのが、多くの西鶴本の挿絵を描いた吉田半兵衛でした。この偉大な絵師についても伝記資料はこれまで全くありません。このような「偶然」の発見は枚挙に暇がありません。

さて、書誌データベースも1万タイトルを超すと、検索機能を駆使することによってさまざまなことが判明します。とりわけ重要なのが、別々に置かれた甲と乙の資料の間に、書写者や旧蔵印が同じであったりするような、有機的な関連が見つかることです。資料というのは単独では寡黙であっても、関連するものが一つでも出現すると、俄然多くを語り出すようになるものです。

その点、個々の資料だけを見ていたら永遠にわからないような資料間の連関を、データベースは瞬時に教えてくれます。古人のかつて知らざる種類の快樂というべきでしょう。

何よりも、この仕事を通して得られた最大の愉快は、人と書物のかかわりについて、より深い理解を実感として得られたことです。それは一言でいうならば、人間とは「死を知る人=ホモ・メモル・モリ」であり、その活動の精華が、書物を通して過去及び未来の人とコミュニケーションを持つとうとする「本の人=ホモ・リブラリウス」である、ということです。そして私も何とかその仲間入りをするために、学生たちを誘って、日々文庫に通っているのです。



- 1 岩瀬文庫と旧書庫
- 2 表紙裏から出てきた文書  
(裏焼き写真)
- 3 岩瀬文庫で見つかった  
新出の好色本『好色三部書』

1957年、神戸市生まれ。東京大学卒。

現在、名古屋大学大学院文学研究科教授（日本文学）・附属図書館  
研究開発室室員・名大サロン世話人・名古屋大学狂虎会代表  
モットー：学は人為（た）ることを学ぶ所以なり（雨森芳洲のモットー）

ひとこと：名大サロンで一緒に遊びましょっ

しむら こう



# 問題解決型教育から問題発見型教育へ

田中 剛 | 大学院環境学研究科教授

現在、大方の教育は問題を解く能力の養成に目標をおいているようです。例えば、初等教育での鶴亀算は、兄弟でみかんとりんごを喧嘩せずに分けあう問題解決法を教えるところに出発点があり、社会科は、歴史の中に“正当な”問題解決法を学ぶところに目的があるのではないのでしょうか。問題を解く教育の集大成は、大学入試でしょうか。ここで試されることの大半は、知識とそれを基礎とした問題を解く能力です。

大学教育の場で学生の基礎能力の乏しさを嘆く声を耳にします。いわく地学の問題に応用する(問題を解く)ための物理化学能力、生物実験をうまく行うための化学の基礎、などなど。ここで私たちが要求しているのは、今なお問題解決を目的とした基礎能力ではないのでしょうか？アイソトープ、X線解析、教えているテクニックもまた問題解決を目的としているように見えます。小・中・高での十数年に及ぶ問題解決型教育の上に、です。

問題を解く力はとても重要だと思います。が、名古屋大学では、そこに少しだけ問題を発見する教育を加えてはいかがでしょうか？どうやって教育するかはとても難しそうです。なにせ今まで試みられた事が少ないのですから。筆者は、その教育手段のひとつがフィールドにあると考えています。工科系、文科系にもフィールドがあります。中坊公平さんが社会の問題点に気づき、弁護士活動に意義を覚えたのは、ヒ素ミルク事件で、患者一人一人に話を聞くというフィールドワークがきっかけであると聞きました。

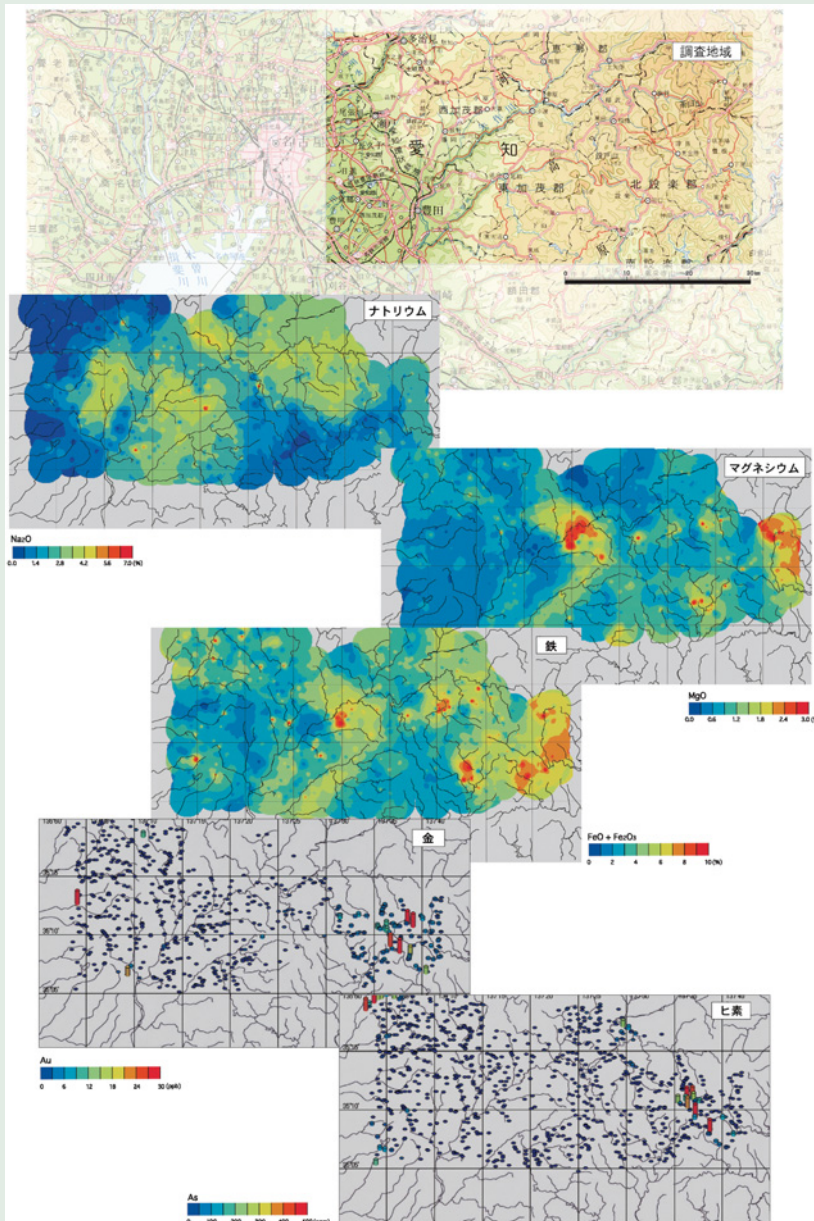


参加者全員が同じ場所で技法の統一をはかります。  
(2004年度 教育改革・改善総長裁量経費)

環境学研究科のグループでは、地面の化学環境評価をめざして、愛知県東部の“地球化学図”を作っています。地面の環境は、高校で学ぶ理科の科目に対応して整理されます。高低・方向・距離などの物理情報を図化した地形図、植物群集の分布など生物情報を図化した植生図、岩相や断層などを表す地質図、そして元素や同位体の分布を図化したのが地球化学図です。初めての地球化学図は未知への探求です。難しいのが面の化学を代表する試料採集です。私たちは、小さな枝川の出口ごとに細かな川砂を集めて分析します。この作業には、環境学研究科を始め、生命農学研究科、博物館、の教員とたくさんの学生が協力します。新人も多いので、まずは写真のようなやや広い川で、試料採集の技法を統一します。

右図にナトリウム、マグネシウム、鉄、ヒ素および金の地球化学図を示します。マグネシウムと鉄には、図の中央部と東南部(右下側)に濃度の高い部分がみられます。この地域には、苦鉄質岩(マグネシウムや鉄に富む岩石)が分布しますから主要化学成分の多くは、その地域の地質による自然界のバックグラウンドと思えます。しかし、これら2元素の分布を細かく見ると、図の中央より東(右)側では、マグネシウムと鉄の分布は、ほぼ一致するものの、西(左)側にスポット状に分布する鉄の多い場所にマグネシウムは伴わず、苦鉄質岩もありません。衛星写真との対比でゴルフ場の分布がこれらの地点に一致することが判りました。

図の下部に、金とヒ素の分布を並べました。図の東(右)方の金の多い所は、武田信玄の時代から有名な津具の金山(現在は廃鉱)周辺です。金鉱床では、金とヒ素とアンチモンが高い相関を示すとの学説どおり、ここでも3元素は高い相関を持って分布します。鉱山直下のずりの影響を受けた川砂も分析されており、当然1000ppb近い金と数百ppmのヒ素が検出されています。しかしヒ素は、金の採掘がなされた形跡のない地域にも分布し、鉱山直下より濃度の高い地点さえ見られます。この地域に広く分布するヒ素は、金の鉱兆であり、自然界のバックグラウンドと判断されます。



愛知県東部の地球化学図とその調査地域。  
すべての図は同一地域を表します。

このフィールドワークを、学生たちは“どぶさらい”と呼びます。しかし、汚水の流れ込む川の中で採集した試料が周囲と違わない時、清流で採集した試料にヒ素が多い時、学生の心には常に“なぜだろう？”という問いかけが沸き起こるようです。名古屋大学からは、人の後を追う問題解決型より、人を引き連れる問題発見型の卒業生を輩出したいと念じています。

1969年名古屋大学理学部を卒業、修士課程を経て、工業技術院地質調査所研究員。  
1990年理学部に戻り、2001年から環境学研究所所属。  
趣味は、あまり手をかけない家庭菜園。

たなか つよし



# 地域共同研究：らくらくパソコン「e-なも君」プロジェクト

横井 茂樹 大学院情報科学研究科教授

## 1. 中高齢者とパソコン

現在、ほとんどの年代でパソコンやインターネットが使えるようになって便利な道具として定着していますが、中高齢者はパソコン利用者の率が低く、とくに65歳以上では、パソコン利用者の率は20%以下です。中高齢者にとってパソコンを身に付けるのにはかなりの壁が存在します。しかし、努力してパソコンの操作法を身につけた人は非常にうまく活用しておられ、多くの人と交流したり、趣味を広げたり、色々な情報を得たりと、生活に欠かせないものとして利用されています。



図1. e-なも君ソフトの操作  
マウスのみで操作する。文字は画面上に表示され、それをマウスでクリックして入力していく。

## 2. e-なも (えーなも) 君ソフト

高齢者にとってキーボードの操作を覚えるのが大きな壁になっているため、本プロジェクトでは、キーボードを使わないで文字を入れられる簡単なオリジナルソフトを開発しました。また、デザインも工夫を凝らし、見やすい字、分かりやすく簡単な操作をとり入れ、極力機能を少なくしたシンプルなソフトを目指しました。

このソフトの開発には開発委員会（私が委員長を担当）を構成し、多くの人々の意見を取り入れ、また、実際に中高齢者にむけて試験的な講習会を何度か実施して改良を重ねてきました。

初めてパソコンを使う人でも簡単に電子メールとインターネットホームページ閲覧が可能になるような以下の機能を持つソフトです。

- (1)文字入力ソフト：キーボードを操作しなくてもマウス操作のみで直接文字を選びながら入力していけるソフトです。
- (2)インターネット閲覧ソフト：通常のインターネットホームページを閲覧するソフトは文字が小さくみにくい問題があるとともに、機能が多すぎて操作を覚えにくいといった問題があるため、大きな文字で簡単な操作でインターネットを閲覧できるソフトを開発しました。はじめに

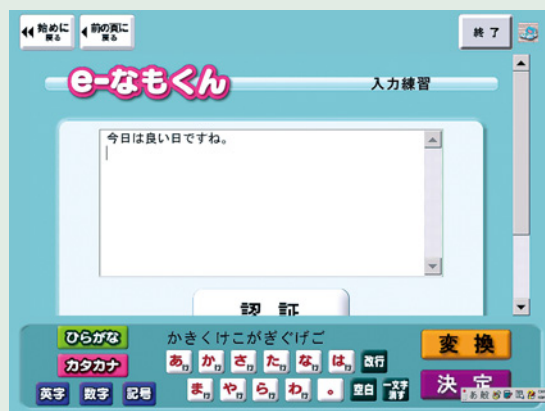


図2. 文字入力画面  
50音の各行の先頭文字を表示し、1文字クリックすると、その行の文字のすべての大文字、濁音、撥音等がすべて表示され、そこから選択してクリックすると1文字入力される。変換・決定の操作は通常のワープロソフトと同じ。

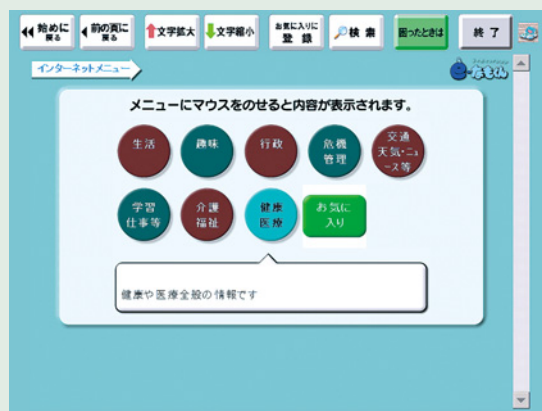


図3. Web閲覧ソフトの画面  
マウスによるボタン操作で好きなホームページを選択できるようなソフトです。



どのホームページを見たらよいかわからない人のために、推薦ホームページを入れておき、この中から簡単にホームページを選べるような機能を用意しました。直接単語を入れて検索する機能も用意しました。

- (3)電子メールソフト：現在の電子メールソフトは用語や使い方が分かりにくいので、なるべく実際の手紙に近い感覚で、文章や宛先を入れて送ったり、受け取ったメールを簡単に見られるようにしたソフトを開発しました。説明用の文字もなるべく実際の手紙に近い言葉を使って理解しやすくしてあります。

### 3. e-なも君プロジェクトの経過と推進体制

平成13年頃から名古屋都市産業振興公社（名古屋市の産業振興のための外郭団体）において、名古屋大学や企業などが参加して、地域情報化の研究会が開かれていました。

平成15年度に名古屋市長（松原氏）が誰でも使える「ナマケモノパソコン」を作れないかという提案があり、上の研究会でソフト開発の検討を開始しました。平成16年度にソフトウェア開発委員会を設置しソフトと教材を開発しました。委員会メンバーは以下の通りです。なお、現在は開発段

階をほぼ終えましたので、推進委員会と名称変更し、e-なも君ソフトの普及促進のための活動を行っています。

名古屋市 市民経済局・総務局・教育委員会  
名古屋都市産業振興公社  
大学 名古屋大学・中京大学・  
豊橋技術科学大学・金城学院大学  
NPO ITエコサイクル推進機構

平成17年度に情報ボランティアの募集を行い、各区で約300名の応募者に対し、e-なもソフトの講師の講習会を実施しました。平成17年度後半から、ここで学習した講師により各区の生涯学習センターで実際にパソコン教育を実施する計画を進めています。平成17年度中に約1000人の受講者に教える予定です。講習会後も継続して利用を希望する方にNPOが低価格で中古パソコンをリースしたり、テキストとCDのみでの販売も予定しています。

今後は、このソフトを名古屋市以外でも多数の利用者に使ってもらおうよう努力するとともに、中高齢者に役に立つ色々なソフトを開発していく予定です。

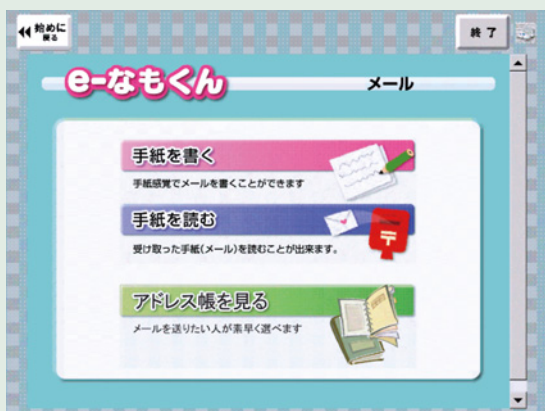


図4. メールソフトの画面  
メールを手紙と同じように扱えるように、手紙のモデルを使ってソフトを開発してあります。



図5. 東生涯学習センターで行われた講習会  
最初に行われたe-なも君の講習会の風景です。  
皆さん熱心に約4時間の講習を受けて頂きました。

古川 範英  
 大学院国際開発研究科国際開発専攻博士課程前期課程2年

## フィールドと私



研究対象と距離を置き、情報を批判的に捉える姿勢を養うことは、アカデミックトレーニングの基本のひとつだろう。しかしながらこうした姿勢は、見るもの聞くものに対して時に過度に批判的になり、その結果として対象と自分とが離れすぎてしまうという弊害を生む可能性もあるように思う。そこでは、その距離ゆえに、何かを自分に引きつけて「感動する」ということを忘れがちになってしまうことがあるのではないだろうか。「フィールドワーク」は、国際協力に携わるうえで自分にとっての原点とも言うべき「感動する気持ち」を思い出させてくれる。またそれと同時に、アカデミックな面での宿題も山のように与えてくれる、大変有意義な経験だ。

大学院に入学して初めてのフィールドワークは、2004年の10月、フィリピンでの海外実地研修だった。およそ2週間の滞在期間で、教育グループの私は村の小学校や中学校、また首都の教育省などを訪問し、教員や学生へのインタビュー調査、資料収集を行った。2回目のフィールド体験は、2005年3月におよそ3週間、今度はカンボジアでの調査だった。現地では農村部を中心に回って村人にインタビュー等を行い、また調査の後半にはカンボジア中から教育関係者、地域の代表者を招いてワークショップを開催するという、個人的には身に余る壮大な計画に参加する機会に恵まれた。本格的に学び始めて間もない分野で、どち

らの調査もがむしゃらなやる気だけで飛び込んだというのが正直なところだ。事前のリサーチデザインや、現地の調査手法など、訳のわからないことだらけでやや困惑気味であったが、研究室を飛び出して、実際にそこに暮らす人々と出会い、話をして、同じ空気を共有すること、そしてそこから全身で感じることの楽しさと大切さを学んだ。また、情報収集、分析の難しさなど、調査のあらゆる段階において課題を発見したことはいうまでもない。

そしてこの文章を書いている今現在は（2005年9月）、青年海外協力隊候補生として、福島県の山間に建つ訓練所でまたひとつ新たなフィールドに飛び出す準備を進めているところだ。派遣予定先はアフリカのマラウイ共和国で、青少年活動隊員として教育、スポーツなど様々な活動を通して現地の青少年の育成を後押しするのが任務である。2年間という任期の間に、たくさんの感動と、宿題を発見したいと強く願う。



- |   |                                      |
|---|--------------------------------------|
| 1 | 1 2004年10月、フィリピンの小学校での一枚。            |
| 2 | 2 2005年3月、カンボジアにて、調査に御協力頂いた家の庭先での一枚。 |

ふるかわ のりひで  
 1981年4月2日生まれ  
 愛知県名古屋市出身

## 米国研修から4年

研究協力・国際部国際課国際企画掛（国際学術コンソーシアム推進室）  
久田 淳子

国家公務員試験に合格して名古屋大学に採用されてから、はや10年目を迎えています。海外で1年間の研修を受ける機会を得て、その後4年余り、国際関係部署にて仕事をしている、こんな事務職員がいる、という事例紹介としてお読み下されれば幸いです。

## 簡単な職歴

庶務部庶務課に採用され、3年間、総務・広報を担当しました。その後、1年の文部省学術国際局国際学術課併任を経て、本学国際交流課所属となり、アメリカで1年間、研修を受けました。帰国後は引き続き国際交流課及び国際課に配属され、現在に至っています。（組織名は当時のものです。）

## 米国研修

文部省併任中に LEAP（国際教育交流担当職員長期研修プログラム）に応募し、翌年度に1年間米国大学で研修を受ける機会を得ました。1年のうち前半はモンタナ州立大学において英語研修、聴講、インターンシップ、コロキウム（米国高等教育講義）、NAFSA 地域会合参加、ワシントンDC 訪問等を LEAP 参加者全員（12名）で経験しました。後半は、参加者が全米各地の大学に散らばり、個別にインターンシップや語学研修等に励み、最後に NAFSA 年次会合に全員が参加するという大変充実した研修でした。私は後半をテキサス A&M 大学で過ごし、国際課でのインターンシップを中心に、他部局へのインタビューや語学研修等を行いました。（研修の詳細は、本誌第88号、第100号及び第102号でも報告しました。）

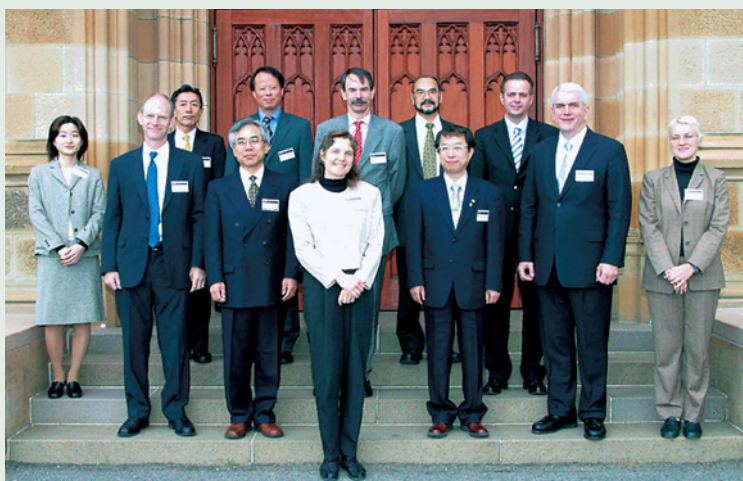
外国人、留学生、インターンという立場を実際に経験できたことで、彼らを迎え入れるという逆の立場で仕事をしてきた自分を見つめ直し、また、日米の大学を比較し多くの相違点を発見することで、それぞれの良さ

や課題を実感することができました。さらに、研修を通じて出会った多くの人達とのネットワークは、研修を終えた今も私の大きな財産となっています。

## 帰国後の業務と所感

国際交流課にて、文部科学省等の研究者交流事業や国際広報を担当した後、現在は国際課で国際学術コンソーシアム（AC21）推進室事務を担当しています。本学教員10余名からなる AC21 推進室員との連携協力により、本学をはじめとする AC21 メンバー25大学や5つのパートナー（企業・NGO）と行う活動の検討・実施支援業務を行っています。また、実際に活動を行うにあたって、各メンバー大学の窓口担当者や参加者との連絡調整、各種手配等、イベントオフィスの業務も行っています。例えば今年度は、7月29日～8月8日に本学等において AC21 学生世界フォーラムを開催しました。本学を含め18機関から各1名の学生が代表として参加し、30名以上の本学ボランティア学生のサポートを得て、成功裏に終了しました。

これらの業務を行う際、米国研修を経験したことが自分の大きな支えとなっていると感じています。語学研修の成果をいかすことはもとより、異文化を尊重すること、現実に即した柔軟な制度運用を考えること等、なかなか常に念頭に置くことは難しいですが、出来るだけ研修当時の気持ちを忘れずに業務にあたりたいと考えています。



AC21国際フォーラム2004（シドニー大学にて）左端が筆者

ひさだ あつこ  
1973年生まれ

## 文学部が木浦大学校夏期日本語研修生を受け入れる

文学部は、7月23日(土)から8月11日(木)まで、韓国木浦大学校から夏期日本語研修生15名及び引率教授1名の計16名を受け入れました。

この研修生受入制度は、文学部と木浦大学校人文科学大学との間で、平成3年6月に締結された学術交流協定(平成11年5月に大学間協定となる)に基づく学生交流の一環



成果報告会で発表する研修生

として、平成4年から毎年実施されているものです。

研修生は、7月25日から8月9日までの土・日曜日を除く12日間、留学生センター主催の夏季集中日本語講座に参加し、日本語の勉強をするとともに、休日には、本学の異文化交流サークルACEの学生や木浦大学校からの留学生の協力を得て、京都や大須等へ出かけ、日本の歴史や文化に直接触れたり、愛知万博を見学したりしました。

研修の最終日には、成果報告会及び修了式が文学研究科大会議室で行われ、研修生が日本語で研修の成果を数分ずつ発表しました。短い研修期間にもかかわらず、研修生の日本語の上達ぶりには目を見張るものがありました。その後、杉山文学部長から研修生一人一人に修了証書が手渡されました。続いて行われた歓送パーティには、研修生や引率教授、本学の関係教職員など約60名が参加し、研修生やACEの学生の余興等で楽しいひとときを過ごしました。

## 日中 WTO 国際シンポジウムを開催

●大学院法学研究科・法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科と法政国際教育協力研究センターは、8月22日(月)、23日(火)の2日間、北京市において、中国政法大学国際法学院と共催で、日中 WTO 国際シンポジウムを開催しました。

このシンポジウムは、文部科学省科学研究費補助金(特定領域研究)「アジア法整備支援－体制移行国に対する法

整備支援のパラダイム構築」の一環として開催されたもので、大学関係者、弁護士等の法律家、中国政府関係者、マスコミ関係者など2日間で延べ130名の参加がありました。

シンポジウムでは、張保生中国政法大学副校長、佐分法科学研究科長のあいさつの後、松下満雄東京大学名誉教授(元WTO上級委員)による基調講演「日本の対外貿易摩擦とWTO」及び張玉卿中国政法大学教授(元中国商務部条約法律司長)による基調講演「米中貿易摩擦における法的問題」が行われました。その後、知的財産権、農産物保護、紛争解決及び貿易救済措置に関する報告と質疑応答がありました。今回の報告者やコメンテーターには、両国のWTO研究・実務の最前線で活躍する方々が参加し、また、今日ではWTOの守備範囲も相当広がったこともあり、2日目の総合討論では、環境とWTOに関する討論が活発に展開されるなど、予想を超える盛り上がりを見せました。

大学院法学研究科と法政国際教育協力研究センターでは、今回得られた貴重な人的ネットワークを活用し、WTOをはじめとする様々な分野の研究に積極的に取り組んでいく予定です。



シンポジウムの様子

# ウズベキスタン共和国で 日本法教育研究センター開所式を開催

●大学院法学研究科



開所式の様子

大学院法学研究科は、9月7日（水）、ウズベキスタン共和国タシケント国立法科大学において、名古屋大学日本法教育研究センター開所式を開催しました。併せて、日本政府の草の根文化無償資金協力によるタシケント国立法科大学への視聴覚機材供与式も開催されました。

同研究科は、アジア地域を中心に国際交流を積極的に推進し、ウズベキスタンをはじめ、ベトナム、カンボジア、ラオス、モンゴル等のアジアの体制移行国から多数の留学生を受け入れるとともに、英語による「日本法教育コース」を開設し、法曹人材養成の教育拠点の形成に努めてきました。こうした実績を踏まえ、本格的に日本法に精通した法曹人材を系統的に養成するために、タシケント国立法科大学内に、名古屋大学日本法教育研究センターを設置し、日本語による「日本法教育コース」の開設に着手しました。伝統的に日本法に精通した法曹を数多く輩出してきた東アジア地域だけではなく、中央アジア地域でも日本法に精通した法曹を養成し、将来、彼らが、司法機関、政府機関、

立法機関や、企業等の経済界で活躍することで、日本のアジア地域における友好関係を安定、発展させて相互理解を深めることができると期待されています。

開所式には、平野総長、佐分法学研究科長、海内文部科学省大臣官房国際課海外協力官、楠本在ウズベキスタン共和国大使館特命全権大使、西宮国際協力機構ウズベキスタン事務所長、ルスタンバーエフタシケント国立法科大学長ら関係者が多数出席し、センターの開設を祝いました。開所式終了後には、視聴覚機材が設置された日本法教育研究センター教室で、平野総長、ルスタンバーエフ学長がテープカットを行った後、同教室と法政国際教育協力研究センター会議室をインターネットで結び、会議が行われました。

式典後には、平野総長、佐分法学研究科長、法学研究科教員等は、同研究科が学術交流協定を締結しているウズベキスタン共和国の世界経済外交大学及びサマルカンド国立大学を表敬訪問しました。



(左) 中山文部科学大臣の祝辞を代読する海内文部科学省大臣官房国際課海外協力官



(右) あいさつする平野総長

## 国際シンポジウム

# 「体制移行国における憲法適合性審査機関の役割」を開催

●大学院法学研究科・法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科と法政国際教育協力研究センターは、7月29（金）、30日（土）、名古屋市内のホテルにおいて、アジア法整備支援研究プロジェクト及び日口法学シンポジウム実行委員会と共催で、国際シンポジウム「体制移行国



参加者による記念撮影

における憲法適合性審査機関の役割－人間および市民の権利・自由の保護を中心として－」を開催しました。

シンポジウムには、旧ソ連地域(ロシア、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン)と中東欧(ポーランド、ハンガリー)の体制移行国から憲法裁判所裁判官が、また、ヨーロッパ人権裁判所から代表が参加し、各国の憲法裁判所が人権保護の問題にどのように取り組んでいるのか、ヨーロッパ人権裁判所が各国の法制度改革や憲法裁判所等の裁判に対しどのような影響を与えているのかについて、当事者から報告がありました。その後、報告に基づいて活発な討議が行われ、各機関の今後の課題が明らかになりました。

## オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」始まる

大学院経済学研究科エクステンション・サービスは、9月10日（土）から、経済学部カンファレンスホールにおいて、オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」を開講しています。

オープンカレッジは、中高生等に、大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意をできるだけわかりやすく伝えるために、昨年度に引き続き開講されたもので、「自由奔放！サイエンス」という総合テーマの下に、本学の様々な専門分野の教員が、中高生にもわかる言葉で最新の研究について講義を行います。今年度は、来年3月まで10回の講義が下記のとおり予定されています。

### 【講義日程】

- 9/10 鉄の技術と文化－たたら製鉄の現代的意味－  
黒田光太郎（大学院工学研究科）
- 9/24 「人の身になって考える」とはどういうことなのか？  
齋藤 洋典（大学院情報科学研究科）
- 10/15 宇宙を実感してみよう  
－物理学の活かし方その2－  
田原 譲（エコトピア科学研究所）

- 11/5 人の遺伝子研究でわかったこと  
濱口 道成（大学院医学系研究科）
- 11/19 生物多様性と地球環境・地域環境  
肘井 直樹（大学院生命農学研究科）
- 12/17 現代日本政治への視角  
小野 耕二（大学院法学研究科）
- 1/14 歴史教育という政治の場  
近藤 孝弘（大学院教育発達科学研究科）
- 1/28 だます人、だまされる人：西洋絵画の楽しみ  
木俣 元一（大学院文学研究科）
- 2/18 太陽と人間  
増田 公明（太陽地球環境研究所）
- 3/4 鉄道の旅から見た明治の日本  
中西 聡（大学院経済学研究科）

## 工学部がテクノフロンティアセミナーを開催 －触れてみよう、電子と情報の最先端に－

工学部は、8月17日（水）から19日（金）までの3日間、電気電子・情報工学科の各実験室等において、テクノフロンティアセミナーを開催しました。

このセミナーは、最先端技術を直接体験し、工学の面白さを理解してもらうことによって、近年の若年層の理工系離れを少しでも改善することを目的に、毎年この時期に、高校生を対象に開催されているもので、今年も、東海地方の13の高等学校から27名の高校生が参加しました。

参加した高校生は、6つの実験課題の中から選んだ課題について、同学部の教員や大学院学生のアドバイスのもと実験に取り組み、最終日には、実験の成果発表とデモンストラーションを行いました。また、実験の途中で、中部電

力(株)名城変電所も見学しました。

参加者は、同セミナーを通じて、食堂等の大学施設の利用や大学院学生との交流で、大学生活を実感するとともに、電子・情報分野の最先端技術に触れることで、工学分野への興味を一層深めたようでした。



「ロボットの仕組みを理解する～書道ロボットを作ろう～」の実験風景

## 工学部・工学研究科技術職員ら5名が 日本工学教育協会賞（業績賞）を受賞

工学部・工学研究科技術職員4名と教員1名が、9月9日（金）、「機械系教育とリンクしたものづくり実習テーマの創案と実践」により、第14回日本工学教育協会賞（業績賞）を受賞しました。受賞者は、千田進幸、松浦英雄、山本浩治、福森 勉の4名の技術職員と松室昭仁工学研究科助教授（平成17年4月から愛知工業大学教授）で、広島大学で開催された同協会の第53回年次大会で表彰されました。

同技術職員らは、平成10年から、工学部・工学研究科機械系の学部から博士課程までの学生を対象に、多様なレベルのものづくりコースを開発し、主に創造工学センターを拠点に運営・実施しています。3年前からは、新たに、学部専門科目「材料加工学」とリンクした創造性ものづくり

実習コースを開発し、450名の学生が自主的に参加しています。また、活動の成果は、同協会及び関連学会の論文で報告されています。

なお、大学院工学研究科の同協会賞受賞は、平成14年の「高度総合工学創造実験」以来のことです。



表彰式にて 左から、福森、千田、松浦、山本の各技術職員

## 第4回農業ふれあい教室を開催

●大学院生命農学研究科附属農場



自分たちが作った牧草サイレージの嗜好性を調べる小学生

大学院生命農学研究科附属農場は、今年度の農業教育公園事業の一環として、9月3日（土）、地元小学生とその父兄を対象とした農業ふれあい教室の第4回を開催しました。

今回の教室では、初めに、第1回の教室で作った牧草サイレージを観察し、作ってから4か月近く経っているにもかかわらず、乳酸菌の働きにより牧草が品質良く保存されていることを知り、参加者は皆驚きの様子でした。その後、自分たちが作った牧草サイレージをヤギに与え、他のエサと比較することにより牧草サイレージの嗜好性を調べました。続いて、ヤギの指や爪の形を観察し、人とは形が大きく異なること、ヤギも人と同じように爪が伸びるため、場合によっては爪切りが必要になることについて学んだ後、実際にヤギの爪切りを行い、普段接する機会の少ない家畜とのふれあいを深めました。

## 動物と食をテーマに公開講座を開催

●大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設

大学院生命農学研究科附属山地畜産実験実習施設(通称:設楽フィールド)は、8月27日(土)、28日(日)に大人対象、9月3日(土)、4日(日)に親子対象の公開講座を開催しました。

この講座は、同施設で飼育している家畜(牛・山羊)と奥三河の豊かな自然を生かし、家畜・食・野生動物をテーマに様々な体験をしてもらうことを目的として、毎年夏に



放牧されている牛に近づく子供たち

一般市民を対象に開催されているものです。

今年は、神野教育財団の活動助成を受けて、家畜・食・野生動物を扱った内容の講座が行われ、大人23名、子供19名の延べ42名が参加しました。「家畜」の講座では、放牧されている牛の群れに入ったり、山羊を触ったりして、生きている家畜と五感で触れあいました。「食」の講座では、ニワトリの羽むしりや解体作業、小川での魚捕りをした後、夕食でこれらを食べるという食の過程を体験しました。「野生動物」の講座では、同施設周辺や名古屋市内にも生息するモグラの生態等について、大学院学生の解説を聞き、施設内でモグラのトンネルを探して、皆で掘りました。参加者には、普段意識しないで関わっている家畜や食に改めて気付くこと、野生動物が実は身近な存在であると知ること等ができたこと好評で、いずれの講座にも積極的に参加していました。

なお、公開講座の様子は同施設のホームページ(<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~shitara/public.html>)にも掲載されています。

## 市民公開講座「アルツハイマー病-その病態と克服に向けた試み-」を開催

●環境医学研究所

環境医学研究所は、8月21日(日)、シンポジウムホールにおいて、中日新聞本社の共催を得て、市民公開講座「アルツハイマー病-その病態と克服に向けた試み-」を開催しました。

この講座は、最も深刻な健康問題である脳機能低下の主な原因となっているアルツハイマー病(AD)をテーマとして取り上げ、市民向けに紹介しようとするもので、定員

200名に対し、これを超える応募があり、ADに対する関心の高さを伺わせました。当日は、一時の悪天候にも関わらず、200名を超える幅広い職業・年齢層の方々の受講があり、中には夫婦や親子で受講する方もいました。

開講にあたり、児玉同研究所長からあいさつがあった後、錫村明生同研究所教授による「アルツハイマー病とは」と題するイントロダクション講演を皮切りに、黒谷 亨同研究所講師による「記憶のメカニズム」及び水野哲也同研究所助教授による「神経変性のメカニズム」と題する講演が行われました。続いて、我が国のAD研究の第一人者である柳澤勝彦国立長寿医療センターアルツハイマー病研究部長が、「アルツハイマー病の病態と治療」と題して、AD脳における神経細胞死の進行阻止をねらった先端的治療薬の開発研究の現状について、また、澤田 誠同研究所教授が、「人に優しい脳疾患治療法開発の試み」と題して、脳疾患の治療の難しさやミクログリアを用いた脳標的化治療法の開発について講演しました。受講者は、ユーモアを交えた分かりやすい講演に聞き入り、講演後には、活発な質疑応答も行われました。



児玉環境医学研究所長の開講のあいさつを聞く受講者



## 名古屋大学電子図書館国際会議を開催

名古屋大学電子図書館国際会議（The International Advanced Digital Library Conference in Nagoya : IADLC 2005）が、8月25日（木）、26日（金）の2日間、野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて、文部科学省、国立国会図書館及び国立大学図書館協会の後援を得て開催されました。

この国際会議は、大学等が生み出す研究成果と所有する



開会のあいさつをする平野総長

知的資産を広く学界や社会へ還元するため、高度に発達した情報技術を駆使した新しい電子図書館機能研究の開発を目的として、附属図書館、附属図書館研究開発室、情報連携基盤センター及び本学情報系 COE が連携協力する形で行われました。

会議では、主催者を代表して、平野総長による開会あいさつ及び伊藤義人組織委員会委員長（附属図書館長）の趣旨説明があった後、電子図書館の理論的モデル、電子図書館システムの事例紹介、電子ジャーナル、デジタル・レファレンス、電子情報資源の統計、利用者志向のシステム構築のあり方、メタデータ、データマイニングの問題など、電子図書館に関わる情報資源の有効な流通、組織化、蓄積、利用、提供、そして新しい知識の構築等の広範なテーマについて、国内外のスピーカーによる16件の発表が行われました。台風の接近で開催が危ぶまれたにもかかわらず、米国、中国、シンガポール、タイや国内の大学等の研究者、図書館員、技術者など総勢180名の参加があり、活発な討議が行われました。

## 博物館が名誉教授による特別講演会を開催

博物館は、8月24日（水）、9月14日（水）、博物館講義室において、第6回企画展「核分裂絵巻」に関連した2つの講演会を開催しました。

8月24日には、外山茂樹名誉教授が、「絵で見るやさしい核分裂物語」と題して、企画展の図録をテキストに、核分裂絵巻構想の経緯、日本とドイツの人的交流の歴史、核分裂絵巻の主要な絵の科学的背景と絵に込められた思い

を、当時の世界情勢を交えて分かりやすく解説しました。講演後には、原画の前でギャラリートークが行われ、参加者は科学と芸術の融合を堪能していました。

9月14日には、仁科浩二郎名誉教授が、「核分裂：幾つかの基本的原理と歴史的逸話」と題して、講演を行いました。仁科名誉教授は、核分裂の根本原理、核分裂反応の発見の歴史、父であり科学者の仁科芳雄とニールス・ボーアやリーゼ・マイトナーとの交流の話から始め、仁科芳雄の業績については、理化学研究所の同僚や弟子による文章を引用しながら、家族しか知らない当時のエピソードも交えて、分かりやすく解説しました。また、日本の原子核物理学のレベルが高かった例として、ビキニ環礁における水爆実験で第五福竜丸が浴びた死の灰を日本人研究者が詳しく検討し、爆弾にウラン238が使われたと指摘したことが、アメリカ軍の首脳を驚かせた話も披露され、参加者は興味深く聞き入っていました。

なお、8月29日には、核分裂絵巻展の入館者が1000名に達し、1000人目とその前後の3名に、記念品として、仁科芳雄の切手が認定書とともに渡されました。



講演する仁科名誉教授

## 環境学研究科がシアクラ大学理学部と 学術交流協定を締結

大学院環境学研究科は、8月27日（土）、インドネシアのシアクラ大学理学部と学術交流協定を締結しました。

同研究科では、昨年、M9のスマトラ北部地震が襲ったインドネシアのバンダアチェに調査団を派遣する等、津波災害について、地震学・社会学等の文理両面から研究に取り組んでいます。また、多くの犠牲者を出したスマトラ北部地震の自然科学的背景だけでなく、復旧から復興へのプロセスの解明に向けて、現地のシアクラ大学の協力を得て、共同調査のほかに特別講義等も実施しています。

今回の協定は、こうした学術・研究交流をより推進することを目的として締結されたもので、シアクラ大学において行われた調印式には、黒田研究科長等が出席しました。

同大学には、本学をはじめ、日本で博士号を取得した研究者が多くいることから、日本語のスピーチもあるなど和やかなものとなりました。今回の締結により、インドシアにおける地震・防災研究に大きな役割を果たすことが期待されます。



調印式の様子

## 留学生日本語研修コース修了式を挙

●留学生センター

留学生センター外国人留学生第52期日本語研修コース及び第24期日本語・日本文化研修コース修了式が、9月13日（火）、大学院国際開発研究科オーデトリウムにおいて挙行されました。

修了式では、研修生への修了証書授与に続き、江崎留学生センター長があいさつし、愛知万博と時を同じくして本学で研修生として勉強した意義について話しました。続いて、山本理事（国際交流担当）から祝辞があり、「若いときの海外での経験は何ものにも代え難い。今後の活躍を期待する。」と激励しました。最後に、研修生を代表して、ウェンピ サプテラ（インドネシア出身）さんと李睿（中国出身）さんから、有意義な1年（半年）であり、貴重な

体験をすることができた等の謝辞がありました。

続いて開催された懇談会では、研修生全員が一言ずつあいさつし、研修を担当した講師や同センターのスタッフへの感謝と研修を一緒に受けた仲間との思い出等が語られました。



江崎留学生センター長から修了証書を授与される研修生

## ICCAE 第2回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、9月15日（木）、ユネスコジャカルタ事務所「多様性」プロジェクト関係者を招いて、第2回オープンセミナー「多様性-共に気づかい、共に維持する」を開催し、学内外から約30名の参加がありました。

セミナーでは、ハン チュンリー同事務所副所長のあいさつの後、ユネスコが愛知万博国連館「多様性の祝祭」に出展したビデオが上映され、アジア・太平洋地域の文化・生物多様性、持続的伝統活動、現地の環境への認識と理解、自然資源と環境を脅かす変化への対応が紹介されました。その後、竹内邦良山梨大学教授の司会で、ビデオで紹介された中国雲南少数民族問題、ベトナムのカットバ・ハロン

ベイの観光産業による海洋景観破壊の脅威、インドネシアのシルバート島の固有文化と生物多様性、カンボジア・トンレサップ湖の資源問題が、現地及び日本関係者により詳細に説明され、討議後、ユネスコへ多様性維持のための要請が行われました。



オープンセミナーの様子

### ●総務企画部長



永田 幸男  
(ながた ゆきお)

〈略歴〉

昭和40年3月 豊田工業高等専門学校採用  
平成12年9月 名古屋大学環境医学研究所事務長  
平成15年4月 名古屋大学大学院環境学研究所・地球水循環研究センター事務長  
平成17年10月 名古屋大学総務企画部長

## 名大を表敬訪問された方々 [平成17年6月16日～9月15日]

### 6.20 中国教育部・中国大学教職員訪日代表团

劉宝利中国教育部国際司副司長、趙靈山同教育部国際司来華処副処長、吳勁松同教育部国際局亜比処副処長、吳慧貞復旦大学留学生弁公室主任、盧江濱武漢大学国際交流部部長、楊力行中国地質大学人事処処長、許宏武中南大学師資管理弁公室主任、荷立榮蘇州大学海外教育学院教学中心主任、陳強同済大学国際文化交流学院副院長及び王勇北京大学国際合作部部長助理（部長補佐）が訪問され、中国における学術支援の現状と両国の学術交流の推進について懇談が行われました。

### 6.23 韓国大学総長協会

李大淳韓国大学総長協会理事長、姜一求湖西大学校総長、金慶洙中央大学校体育大学長、金河準前麗水大学校総長、辛相田徳成女子大学校総長、李鈞範東新大学校総長、張允翼前慶州大学校総長、趙錫璉平澤大学校教学副総長、崔炳賢湖南大学校教授他1名が訪問され、本学における法人化後の大学運営や産学官連携の現状等について、総長等の説明を基に意見交換が行われました。



### 7. 4 哈爾濱工業大学校務委員会主任等

郭大成哈爾濱工業大学校務委員会主任、馮吉才同大学材料学院院長、才巨金同大学学校事公室主任、梁迎春同大学机电学院院長他1名が訪問され、本学との学術交流の現状と今後の交流促進について意見交換が行われました。



### 7. 8 台湾国立政治大学法学院長等

林秀雄台湾国立政治大学法学院長、劉宗徳同法学院教授、黄程貫同法学院教授、郭明政同法学院教授、林國全同法学院教授、李震山同法学院教授他4名が訪問され、大学院法学研究科との交流実績を中心に、今後の相互理解と交流促進について懇談が行われました。



## 7.12

### 寧夏社会科学院長等

呉海鷹寧夏社会科学院長・全国人民代表大会代表、馬平同科学院回教イスラム教研究所長、景永時同科学院科学研究組織所長、蔡偉同科学院常務副編集者、段慶林同科学院経済研究所副所長他1名が訪問され、本学の学術交流支援に対する謝意と今後の交流のあり方等について懇談が行われました。



## 7.27

### 木浦大学校人文科学大学日語日文学科教授及び夏期日本語研修生3名

許錫木浦大学校人文科学大学日語日文学科教授(引率)及び留学生センター主催の夏季集中日本語講座に参加の同大学校学生代表3名が訪問され、同大学との学生交流の現状等について懇談が行われました。



## 7.28

### シンガポール首相府事務次官等

Eddie Teo シンガポール首相府事務次官、Andrew Fung 労働省課長補佐、Tan Wei Ming 首相府課長補佐、Nah Siew Teen 社会開発・青年・スポーツ省職員他1名が訪問され、本学の男女共同参画の取り組み状況等について懇談が行われました。

一行は、男女共同参画室と意見交換を行うために来学され、その際に表敬訪問されたものです。

## 9. 7

### ウズベキスタン文化・スポーツ大臣等

Alisher Abbasovich Azizkhodzhayev ウズベキスタン文化・スポーツ大臣、Mirsobit Fazirovich Ochilov 駐日ウズベキスタン大使、Bakhtiyar Irmatov エキスポセンター第一副総裁、Arifdjon Zakirov 文化・スポーツ省国際局長、Kakhramon Shakirov 駐日ウズベキスタン大使館参事官、Jahongir Umalov ウズベキスタン国営放送コメンテーター他3名が訪問され、本学との学生交流の実情を中心に懇談が行われました。その後、ウズベキスタンからの留学生18名との懇談が行われました。



## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年8月16日～9月15日]

記事	月日	新聞等名
1 豊川市穂ノ原にある太陽地球環境研究所を2007年度末までに東山キャンパス内の同研究所東山分室へ移転すると発表	8.16 (火)	東愛知
2 本学や名古屋市などは共同で高齢者向けの安価なパソコン入門ソフト「らくらくパソコンe-なもくん」を開発	8.16 (火)	日経(朝刊)
3 ときめき時日記: 深津将史さん・本学学生 自分の限界に挑戦したい	8.16 (火)	中日(朝刊)
4 まちづくりプランコンテスト: 長谷川佳美さん・本学学生 自分たちの思いをプランに託す	8.16 (火)	中日(朝刊)
5 宮城県沖地震: 鈴木康弘・環境学研究科教授と安藤雅孝・同研究科教授がコメント	8.16 (火)	中日(夕刊)
6 「意外な原因による血液の病気と血液が原因の意外な病気」をテーマに高松純樹・医学部附属病院教授が27日に講演	8.16 (火)	日経(夕刊)
7 国内外3名のノーベル賞受賞者が「人類の未来と科学技術」をテーマに講演・討論するシンポジウム9月10日開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授が討論に参加	8.17 (水) 9.11 (日)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年8月16日～9月15日]

記事	年月日	新聞等名
8 理学研究科のエックス線天文学グループが JAXA などと協力して開発したエックス線望遠鏡に、エックス線 CCD カメラを取り付けたエックス線天文衛星「すざく」が、小マゼラン星雲の超新星残骸の撮影に成功 國枝秀世・理学研究科教授は「すざくの運用で宇宙の成り立ちについての研究が大きく進展すると期待」と話す	8.18 (木)	読売
9 竹沢邦泰さん・本学学生が結成した学生グループ「震災ガーディアンズ」が、17日被災時に役立つ知識などを紹介する企画「震災・防災に触れよう～震災は必ずやってくる～」を愛知万博・瀬戸会場内の市民パビリオン・対話ギャラリーで開催	8.18 (木)	読売
10 スーパーサイエンスハイスクールの指定校である一宮高校と帯広柏葉高校の生徒が、上出洋介・太陽地球環境研究所教授らの仲介で、「スーパーサイエンスハイスクール夏の学校 in 陸別」で交流	8.18 (木)	中日 (朝刊)
11 高等研究院で世界レベルの研究を続けてきた教授 5 名の講演を一度に聴くことができる「高等研究院第 1 回スーパーレクチャー」が、9 月 8 日野依記念学術交流館で開催	8.18 (木) 9. 6 (火)	読売 中日 (朝刊)
12 全国89の国立大学、法人化後初めてとなる2004年度決算概要発表 本学は純利益 7 位	8.20 (土) 8.24 (水)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
13 本学と名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、愛知県、名古屋市でつくる愛知建築地震災害軽減システム研究協議会は、木造住宅の耐震性向上を目的とした耐震補強技術や工夫のコンペを実施	8.21 (月)	読売
14 科学技術振興機構は、2005年度戦略的創造研究推進事業として、「超低消費電力光ルーティングネットワーク構成技術」(佐藤健一・工学研究科教授)、「ソフトウェアとハードウェアの協調による組み込みシステムの消費エネルギー最適化」(高田広章・情報科学研究科教授)、「生体系の高精度計算に適した階層的量子化学計算システムの構築」(天能精一郎・情報科学研究科助教授) などチーム型51件、「機能性 RNA による代謝調節の分子基盤の解析」(稲田利文・理学研究科助教授)、「3 次元空間の精密有機建築化学」(伊丹健一郎・物質科学国際研究センター助教授)、「高分子メゾスコピックダイヤモンド構造の構築」(高野敦志・工学研究科助教授) など個人型65件を採択	8.22 (火) 8.24 (水)	日刊工業
15 文部科学省は、平成17年度派遣型高度人材育成協同プランに本学と東京大学、信州大学、三重大学との共同プロジェクトなどを選定	8.23 (火)	中日 (朝刊)
16 科学技術交流財団主催の研究交流クラブ定例会「先導的科学技術の研究ーバイオ技術が拓く新たな可能性」9月21日開催 2002年度から2004年度にかけて石浦正寛・遺伝子実験施設教授らやモリテックスなどの共同研究グループが取り組んだ研究成果発表など	8.23 (火)	日経 (朝刊)
17 私の万博見聞録：豊田工業高等専門学校長・末松良一・本学名誉教授 人間とロボットとの関係のあり方、再考を	8.23 (火)	中日 (朝刊)
18 学ぶ磨く 中日文化センター訪問：岩崎宗治・本学名誉教授の新講座 同時代の絵画を参照しシェイクスピア語る	8.25 (木)	中日 (朝刊)
19 研究スポット：亀井謙・医学系研究科助教授らの脂肪細胞の大網を利用して骨づくりする研究	8.26 (金)	中日 (朝刊)
20 訃報：石水照雄・本学名誉教授	8.26 (金)	中日 (朝刊) 読売
21 朝日カルチャーセンター公開特別講座「井口先生が語る『老年学』」9月13日に開催 井口昭久・医学系研究科教授が講演	8.26 (金) 8.27 (土)	朝日 (朝刊)
22 名古屋市の市民団体など 5 団体が児童館や公民館など公共施設の運営受託 NPO を支援する「NPO 指定管理者機構」設立 10月をめどに後房雄・法学研究科教授らを講師にアドバイザー養成講座を開講	8.27 (土)	日経 (朝刊)
23 特別インタビュー 防災の心構えを聞く：福和伸夫・環境学研究科教授は、大規模災害を想定した対策と心構えが重要と話す	8.27 (土)	朝日 (朝刊)
24 留学生は見た！おらがパビリオン：モハンマド・サーデグ・バリポワさん・本学学生の見たいラン館 充実の「古代」、物足りぬ「現代」	8.27 (土)	毎日 (朝刊)
25 オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」9月10日～2006年3月4日の期間中に10講義開講	8.27 (土) 8.30 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
26 科学技術振興機構は、2005年度の先端計測分析技術・機器開発事業に、「生物発光リアルタイム測定システム」(チームリーダー：石浦正寛・遺伝子実験施設教授)、「スピン偏極電子源」(チームリーダー：中西彊・理学研究科教授) など18件を新規採択	8.29 (月)	日刊工業
27 With：名古屋大学大学院「国際開発研究科」見聞重ねアジア理解	8.29 (月)	朝日 (夕刊)
28 小野耕二・法学研究科教授は、衆院選では、財政危機の“処方せん”を打ち立てることが必要と話す	8.30 (火)	中日 (夕刊)
29 研究室発：安井健二・環境医学研究所教授 不整脈の原因解明が急務	8.30 (火)	中日 (朝刊)
30 江南商工会議所が10月20日江南市民文化会館で創立30周年記念の特別講演会開催 講師に後房雄・法学研究科教授	8.30 (火)	日刊工業
31 法人化後初となる2004年度決算を定例の記者会見で発表 総利益は38億円で全国第7位 平野眞一総長は、「企業など外部からの資金導入にさらに努めたい」と話す	8.31 (水)	中日 (朝刊)
32 福和伸夫・環境学研究科教授の研究室と魚津社寺工務店、日本システム設計の3者が協力して、寺や神社の有効な耐震補強の方法を模型によって探る実験をスタート	9. 1 (木)	読売

記事	年月日	新聞等名
33 9.11衆院選 私の注文：後房雄・法学研究科教授 税源移譲ルール明確に	9. 1 (木)	日経 (朝刊)
34 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 自分の顔、鏡で眺めて	9. 1 (木)	朝日 (朝刊)
35 「3DC コンファレンス2005 in NAGOYA」9月2日開催 谷本正幸・工学研究科教授ら9名が講演	9. 1 (木)	日刊工業
36 ロビー：平野眞一総長は、2004年度決算の結果に「上場企業並みの会計基準導入で財政規律は強まったが、まだ無駄が多い」と話す	9. 2 (金)	日経 (朝刊)
37 訃報：武田進・本学名誉教授	9. 2 (金)	朝日 (朝刊) 他2社
38 藤巻朗・工学研究科教授らの研究グループは、国際超電導産業技術研究センターと共同で、超電導技術を利用し、世界最高速の動作周波数120ギガヘルツの集積回路 (IC) の開発に成功	9. 3 (土) 9. 5 (月)	中日 (朝刊) 他5社
39 留学生は見た！おらがバピリオン：ジャビエ・ゴールドン・オガンボさんの見たケニア 自然が残っている証拠となるチョウ	9. 3 (土)	毎日 (朝刊)
40 留学生が「ニッポンのセンキョ」突撃取材：チャニッサラーさん・国際開発研究科研究生、ワンチャリーさん・同研究生、ビットさん・経済学研究科研究生ら留学生4名が、愛知4区の選挙区を回り、候補者本人や選挙事務所で突撃インタビュー	9. 3 (土)	中日 (夕刊)
41 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 仏教という世界、時空を超えて大いに変容	9. 4 (日)	中日 (朝刊)
42 高橋雅英・医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター教授らの研究グループは、がん細胞活性化に重要な役割を果たすたんぱく質を発見し、「Girdin」と名付ける	9. 6 (火)	中日 (朝刊) 他5社
43 名大サロンの主役：黒田光太郎・工学研究科教授 「たたら」に魅せられて	9. 6 (火)	中日 (朝刊)
44 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授に、6日ドイツのアーヘン工科大学から自然科学名誉博士号が贈呈される	9. 7 (水)	朝日 (朝刊)
45 COE オープンレクチャー「中国における穴あき円形銅銭の出現と展開」14日開催 講師に江村治樹・文学研究科教授	9. 7 (水)	朝日 (夕刊)
46 辻本哲郎・工学研究科教授に、豪雨に強い街づくり、豪雨に対する市民の心構えについて聞く：異常事態へ常に備えを	9. 8 (木)	中日 (朝刊)
47 福和伸夫・環境学研究科教授に防災の心構えを聞く：大地震に備えて今すぐ住宅の耐震化に取り組むべき	9. 8 (木)	朝日 (朝刊)
48 高等研究院第1回スーパーレクチャー8日開催 本学出身の物理学者である益川敏英・京都産業大学教授が講演し、「研究に浪漫を持つことが大切」と話す 家森信善・経済学研究科教授ら高等研究院で成果を挙げた5名の教授らも講演	9. 9 (金)	中日 (朝刊)
49 科学技術交流財団などと共同で人間の皮膚表面から放出される微量ガスの濃度を検出するためのセンサー部分となる小型のリング状ミラー、ガスセルを開発 14日から本学で開催される日本分析化学会で発表	9. 9 (金)	日刊工業
50 留学生は見た！おらがバピリオン：アンナ・マリア・フィゲラスさん・本学学生の見たスペイン館 定番じゃなく、ありのままの国の現在の姿を見せている	9.10 (土)	毎日 (朝刊)
51 第88回東海技術サロン「ナノテク新素材『カーボンナノチューブ』！」30日開催 篠原久典・理学研究科教授らの講演など	9.10 (土)	朝日 (朝刊)
52 菅井秀郎・工学研究科教授の研究グループは、一辺の長さが1メートル以上の大型で高密度のプラズマを均一に生成する技術を開発	9.10 (土) 9.12 (月)	中日 (朝刊) 他3社
53 祖父江元・医学系研究科教授の研究グループは、神経細胞が死滅する難病「球脊髄性筋萎縮症」に、開発中の抗がん剤「17-AAG」が効果があることを突き止める	9.12 (月) 9.13 (火)	日刊工業 他5社
54 東海3県出口調査：「年金」「郵政」一票に直結 磯部隆・法学研究科教授コメント「郵政民営化の是非を問うわかりやすい選挙で、そのわかりやすさが無党派層を動かしたのではないか」	9.12 (月)	読売
55 チリのアタカマ高原に設置した超高性能電波望遠鏡「NANTEN 2」がファーストライトに成功 観測にあたっては福井康雄・理学研究科教授の研究室の水野範和・同研究科助手は、「年内にはサブミリ波での観測をスタートさせ世界に結果を発信できるレベルの観測をしたい」と話す	9.14 (水)	中日 (朝刊)
56 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」11月に金沢、東京、京都の3都市で開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授らノーベル賞を受賞した国内外6名の科学者が参加	9.14 (水)	読売
57 教育学部が10月3日から始まる後期授業の一部を一般に公開	9.14 (水)	中日 (朝刊)
58 技術者にとっての倫理とは：戸田山和久・情報科学研究科教授 目に見えない人々や未来世代の人々にまで社会的・倫理的想像力を広げよ	9.14 (水)	朝日 (夕刊)
59 東海財務局が「金融行政アドバイザー制度」を導入 家森信善・経済学研究科教授ら5名をアドバイザーに委嘱	9.15 (木)	読売

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**10月19日(水)～10月28日(金)**

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
休 館 日：10月22日  
入 場 料：無料  
\*ホームカミングデイ部局行事

**ミニ展示 博物館新着標本**  
**「奈良坂源一郎の蟲魚圖譜 明治の博物画」**



[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

**10月21日(金)～11月11日(金)**

場 所：中央図書館4階展示室  
時 間：10時～17時  
休 館 日：10月27日

**附属図書館2005年秋季特別展**  
テ ー マ：知の万華鏡—書物からみた18世紀の西洋と東洋—



[問い合わせ先]  
附属図書館情報管理課庶務掛  
052-789-3667

**10月22日(土)**

場 所：中央図書館5階多目的室  
時 間：13時～16時

**附属図書館2005年秋季特別展講演会**

講 師：水田 洋名誉教授  
逸見龍生新潟大学助教授  
井上 進文学研究科教授

[問い合わせ先]  
附属図書館情報管理課庶務掛  
052-789-3667

**10月28日(金)**

場 所：共同教育研究施設2号館8階  
大会議室  
時 間：13時30分～15時

**第7回エコトピア科学講演会**  
講 演 者：山本芳弘エコトピア科学研究所助教授  
演 題：エネルギー・環境問題の解決と社会科学

[問い合わせ先]  
長谷川達也エコトピア科学研究所教授  
052-789-4506

**10月31日(月)～11月2日(水)**

場 所：野依記念学術交流館会議室  
時 間：9時～18時(10月31日・11月1日)  
9時～15時30分(11月2日)  
参 加 費：無料

**農学国際協力日米大学連携セミナー**  
テ ー マ：農学国際協力における日米大学の連携をめざして  
Approach to collaboration between the Universities in Japan and the United States in International Agricultural Cooperation  
内 容：発展途上国の農学分野の国際協力に携わる日米の大学・研究機関と、援助機関の専門家が、それぞれのこれまでの取り組み事例を発表し、経験を交換する。日米それぞれ10大学程度と3機関、省庁の関係者、およそ30名が公開で途上国の状況に応じた大学のより効果的な取り組み方について議論し、アジア、アフリカにおける両国の協力・連携の可能性について対話を行なう。

[問い合わせ先]  
松本哲男農学国際教育協力研究センター教授  
052-789-4240

**11月2日(水)～12月16日(金)**

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
休 館 日：月・火曜日  
入 場 料：無料

**第7回名古屋大学博物館企画展**  
テ ー マ：トリ 西 鶏 名大のニワトリ学：解剖学図と標本

[問い合わせ先]  
博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**11月3日(木)**

場 所：中央図書館5階多目的室  
時 間：13時～15時

**附属図書館2005年秋季特別展資料講座**

内 容：担当教員による展示資料解説

[問い合わせ先]

附属図書館情報管理課庶務掛  
052-789-3667

**11月11日(金)**

場 所：IB 電子情報館  
参 加 費：無料

**テクノ・フェア名大2005**

内 容

■研究シーズ展示 (10時～17時)

- ・上田 実医学系研究科教授 「再生医療の実用化と産学連携」  
(10時15分～10時55分)
- ・菅井秀郎工学研究科教授 「プラズマによる新しいモノづくり」  
(10時55分～11時35分)
- ・武田邦彦工学研究科教授 「材料劣化と製品の信頼性一産に対する学の  
貢献の一つの形として」 (11時35分～12時15分)

■展示研究内容概要説明 (ミニ講演)

- ・金武直幸工学研究科教授 「軽量化材料を創る新プロセス」  
(14時～14時20分)
- ・社本英二工学研究科教授 「これからのものづくりを支える超精密技術」  
(14時25分～14時45分)
- ・松田仁樹工学研究科教授 「自然に学ぶ金属廃液の浄化・資源化」  
(14時50分～15時10分)
- ・琵琶哲志工学研究科助手 「音を動力とする音波エンジン・音波クーラー」  
(15時15分～15時35分)

■研究室見学 (13時～17時)

大学院工学研究科、関連研究科・研究所の研究室公開  
※最新情報はホームページをご覧ください。  
<http://www.engg.nagoya-u.ac.jp/techno/techno2005/>

[問い合わせ先]

工学部・工学研究科総務課庶務掛  
052-789-3406

**11月14日(月)**

場 所：シンポジウムホール  
時 間：15時～17時

**21世紀 COE プログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変  
動学」国際シンポジウム 真鍋淑郎先生特別講演会**

講 演 者：真鍋淑郎プリンストン大学客員教授  
演 題：地球温暖化に伴う水利用変化の予測

[問い合わせ先]

21世紀 COE 地球支援室  
052-788-6042・6043

**11月14日(月)～15日(火)**

場 所：野依記念学術交流館

**メダカ生物遺伝資源の標準化に関する国際シンポジウム**

主 催：生物機能開発利用研究センター  
後 援：日本学術振興会、文部科学省新世紀重点研究創生プラン (RR2002)  
ナショナルバイオリソースプロジェクト実験動物メダカ

[問い合わせ先]

若松佑子生物機能開発利用研究センター教授  
052-789-5198

**11月19日(土)**

場 所：大学院生命農学研究科附属農場  
内農業館  
時 間：14時～16時  
定 員：60名  
参 加 費：無料

**地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会**

講 演 者：島岡 清総合保健体育科学センター教授  
演 題：健康と運動

[問い合わせ先]

大学院生命農学研究科附属農場事務掛  
0561-37-0210



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月19日(土)

場 所：博物館野外観察園  
時 間：10時～16時  
定 員：20名程度  
対 象：中学生・高校生

秋の体験実習1 「ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月20日(日)

場 所：博物館野外観察園  
時 間：9時～12時  
定 員：20名程度  
対 象：中学生・高校生

秋の体験実習2 「名大の野鳥観察」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月22日(火)

場 所：野依記念学術交流館  
時 間：13時30分～16時55分

公開シンポジウム

「ITとマイクログリッドの融合ー構想・実証試験ー」

内 容：大学、電力会社、研究機関、メーカーの5名の専門家が、IT技術の導入によるマイクログリッドの高効率・最適な運転制御について講演する

[問い合わせ先]

小島寛樹エコトピア科学研究所寄附研究  
部門助手  
052-789-5874

11月23日(水)～11月27日(日)

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
入 場 料：無料

ミニ展示 博物館新着標本

「18世紀の紋章蔵書票 オルリックの蔵書票  
樋田直人コレクションから」



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月25日(金)

場 所：文系総合館カンファレンスホール  
時 間：13時～

2005年度高等研究院フォーラム

テ ー マ：アジアの共通理解と総合的支援体制

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛  
052-788-6051

11月26日(土)

場 所：環境総合館レクチャーホール  
時 間：12時30分～16時30分  
主 催：大学院環境学研究科都市環境学  
専攻建築学教室

第7回まちとすまいの集い

テ ー マ：世界に開いた窓と名古屋のまちづくり  
プログラム

- ・オープンラボ (12時30分～13時20分)
- ・第1部 基調講演 (13時20分～15時15分)  
「グリッド・シティの可能性ー名古屋の都市デザインを読み解くー」  
片木 篤環境学研究科教授  
「時代を映す空間構造ー新世紀への扉セントレア、愛・地球博ー」  
大森博司環境学研究科教授  
「豊かさ、環境意識、そして国際貢献」 久野 覚環境学研究科教授
- ・第2部 パネルディスカッション「これからの名古屋をかたる」  
(15時30分～16時30分)



[問い合わせ先]

建築学教室 まちとすまいの集い事務局  
(担当：山口・大木)  
052-789-3587

## 名古屋大学ホームカミングデー

本学では、10月23日（日）に、全学同窓会の共催を得て、「名古屋大学ホームカミングデー」を東山キャンパスで開催することになりました。

この行事は、卒業生・修了生、学生、現旧教職員等の本学関係者や学生のご家族、地域の方々等に、本学の種々の

活動に関する情報を発信するとともに、交流の場を提供し、大学の活動を理解していただくことなどを目的に開催するものです。

楽しい一日をお過ごしいただけるよう、準備を進めておりますので、ご家族、ご友人とお気軽にお越しください。

母校へ還る日、新たな出会いが生まれる日。

# 名古屋大学 ホームカミングデー

NAGOYA UNIVERSITY HOME COMING DAY 2005

名古屋大学では、卒業生・修了生・学生・元教職員、学生のご家族、地域の皆さま方に、名古屋大学の活動状況を発信するとともに、教職員との交流の場を提供するため、「名古屋大学ホームカミングデー」を開催いたします。ご家族・ご友人とお気軽にお越しください。

▶ **主なプログラム**

- 10:00～ 教育研究等紹介、大学施設公開、部局行事、その他
- 14:30～ ホームカミングデー開会式・全学同窓会総会
- 15:00～ 講演「F1の楽しみ方」  
トヨタ自動車（株）相談役  
（株）デノソー副会長  
齋藤明彦氏
- 16:00～ 演舞会等

▶ **開催日**  
平成17年10月23日（日）  
（AM10:00より）※雨天決行

▶ **会場**  
名古屋大学東山キャンパス  
（名古屋市千種区不老町）

**入場無料**

主催 名古屋大学  
共催 名古屋大学全学同窓会

ホームカミングデーに関するお問い合わせ先  
名古屋大学総務企画部総務広報課  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
電話：052-789-5759 FAX：052-789-2019  
E-mail：home-coming@post.jimu.nagoya-u.ac.jp  
URL <http://www.nagoya-u.ac.jp/home-coming-day/>

プログラム

内 容	会 場	開始時間	時 間													
			10	11	12	13	14	15	16	17	18					
<b>本部行事</b>																
開会式・全学同窓会総会	豊田講堂ホール	14:30～														
講演会「F1の楽しみ方」	豊田講堂ホール	15:00～														
演奏会	豊田講堂ホール	16:00～														
懇親会	シンポジオンホール	17:00～														
<b>施設公開</b>																
野依記念物質科学研究館 ①ノーベル賞展示室、ケミストリーギャラリー公開	野依記念物質科学研究館	10:00～														
附属図書館 ①附属図書館2005秋期特別展 「知の万華鏡—書物からみた18世紀の西洋と東洋—」 ②中央図書館見学(所要時間30分)	附属図書館	10:00～														
博物館 ①名古屋大学博物館新着標本 「奈良坂源一郎の蟲魚圖譜 明治の博物画」	博物館	10:00～														
広報プラザ ①大学広報物の展示 ②大学紹介DVD上映 ③全学同窓会ラウンジ公開	広報プラザ	10:00～														
<b>教育発信</b>																
名古屋大学紹介	豊田講堂ホール	10:00～														
パネルによる教育活動紹介	豊田講堂ロビー	10:00～														
写真パネルによる学生部活動紹介	豊田講堂ロビー	10:00～														
<b>研究発信</b>																
パネル、デモンストレーション等による研究活動紹介	野依記念学術交流館 野依記念物質科学研究館	10:00～														
<b>その他</b>																
大学文書資料展示 「豊田講堂を中心とした建物整備の変遷」	豊田講堂ロビー	10:00～														
F1カー(実物展示)	豊田講堂ビロティ	10:00～														
生命農学研究科附属農場農産物販売	豊田講堂前庭	10:00～														
名古屋大学グッズ等販売	豊田講堂前庭	10:00～														
軽食・飲み物販売	豊田講堂前庭	10:00～														
食堂営業	北部厚生会館	11:30～														
名大生協北部書籍・購買の営業	北部厚生会館	11:00～														
<b>部局行事、部局同窓会行事</b>																
文学部・文学研究科 文学部同窓会秋期サロン ①昼食会 ②話題提供(田島航堂氏) ③丹羽兎子氏による折り紙実演・展示 ④写真・パネルの展示	文学部大会議室	11:30～														
教育学部・教育発達科学研究科 懇談及び学部紹介	教育学部1階中庭	10:00～														
法学部・法学研究科 法学研究科・法学部ホームカミングデイ ①研究科長・法学部同窓会理事長挨拶 ②講演「会社法改正」浜田道代教授 ③施設見学 ④懇親会	CALEフォーラム (法政国際教育協力 研究センター棟2階)	10:00～														
経済学部・経済学研究科 研究・教育内容のポスター展示	法・経共用館1階 廊下	10:00～														
情報文化学部 情報文化学部の現状について(学部長) 研究活動の紹介(2期卒業生 鈴木助手)	情報科学研究科棟 1階第1講義室	10:20～														
理学部・理学研究科 ①学科別ミーティングと研究室公開 ※ ②理学同窓会総会と懇親会(軽食)	各学科講義室等 野依記念物質科学研究館 講演室及びラウンジ	11:00～ 12:00～														
医学部・医学系研究科 講演会 ①「高齢化社会を迎えて」井口昭久病院長 ②「これからの予防医学」濱嶋信之教授	野依記念学術交流館 2階カンファレンスホール	10:00～														
工学部・工学研究科 研究室公開、その他 ※	各専攻・分野講義室等	11:00～														
農学部・生命農学研究科 概要説明・研究室見学	管理棟1階大会議室	10:00～														
多元数理科学研究科 懇談	理1号館1階109号室	11:00～														
情報科学研究科 情報科学研究科同窓会昼食会	北部食堂「ゆ〜どん」	12:30～														

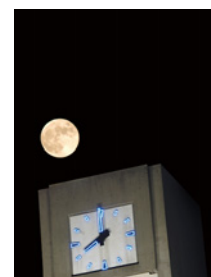
※理学部・理学研究科及び工学部・工学研究科の研究室公開の詳細は、ホームカミングデイのwebをご覧ください。

名大トピックス No.149 平成17年10月15日発行  
 編集・発行/名古屋大学広報委員会  
 本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。  
 名古屋市千種区不老町(〒464-8601)  
 TEL. 052-789-2016 FAX. 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
 (http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/) でもご覧いただけます。

表紙

青色LEDが輝く豊田講堂時計台と満月  
 (平成17年9月18日撮影)



## 42 豊田講堂と勝沼胸像

名古屋大学東山キャンパスにある豊田（とよだ）講堂の南側ロビー内には、1体のブロンズ胸像があります（写真1）。これは、日本芸術院会員の清水多嘉示（たかし）製作による本学第3代総長・勝沼精蔵（1886-1963）の胸像で、本学医学部第一内科同窓会から寄贈されたものです。

豊田講堂が1960（昭和35）年にトヨタ自動車工業株式会社（現・トヨタ自動車株式会社）から建設寄付をうけたものであることについては本連載ですでに触れましたが、その建設寄付をトヨタ自動車工業に持ちかけたのが勝沼精蔵第3代総長でした。

本学では、1950年代後半以降、東山キャンパスの整備が進むにつれて、戦前の名古屋帝国大学時代からの念願であった図書館と大学講堂の建設寄付の実現が課題となっていました。しかし、図書館と講堂の同時建設が困難な状況のなかで講堂優先の方針が定まったことをうけて、勝沼はトヨタ自動車工業の石田退三社長に対して、同社の創設者であり、発明王といわれた豊田佐吉の記念事業として1億

円規模の講堂の建設寄付を打診しています。これをうけた石田社長は、1958年11月に「折角寄付するのだから恥ずかしくないものを」と2億円規模の建設寄付に応じたのでした。

勝沼の要請にこたえる形で始まった豊田講堂の建設は、1959年3月に着工し、翌年5月には竣工しました。しかし勝沼自身は、1959年3月末に任期満了にともなって総長職を退いていました。その後、勝沼は1963年に他界し、豊田講堂で告別追悼式が挙行されました。

1965年11月、医学部から勝沼胸像完成の報告をうけて、11月3日に豊田講堂で除幕式を行うことが学部長会で認められました。除幕式には、勝沼家遺族や篠原卯吉第5代学長など関係者約200名が参列しました。

勝沼胸像の設置場所は、除幕式から約10日後の評議会を経て豊田講堂ロビーとすることが認められました。

なお、勝沼精蔵の胸像は、豊田講堂のほかにも医学部図書館内にも設置されています。



1 | 3  
2 |

- 1 豊田講堂ロビー内の勝沼胸像
- 2 勝沼精蔵ブロンズ胸像
- 3 胸像台の銘版